

北海道利尻富士町

沼浦海水浴場遺跡

第3・4次発掘調査概報

2022年3月

礼文・利尻島遺跡調査の会

目次

はじめに	1
I. 遺跡の概要	2
1. 遺跡の立地と環境	2
2. 遺跡の調査略史	2
3. 調査区の設定と経過	3
4. 調査日誌	5
5. 概報の範囲と遺物の記載、土器の分類について	6
II. 各区の調査概要	8
1. A4区 (A・B地点)	8
2. A3区 (A・B地点)	14
3. B10区 (A・B地点)	19
4. B9区 (A・B地点)	28
5. B8区 (A・B地点)	34
6. C3区 (C地点)	40
7. C2区 (C地点)	43
8. F1区 (F地点)	47
9. F2区 (F地点)	49
まとめ	53
参考文献	55

例言

1. 本書は、沼浦海水浴場遺跡（北海道利尻郡利尻富士町鬼脇字沼浦 132・146 番地、沼浦 146・188-1 番地）の第 3 次・第 4 次調査の概要報告である。発掘調査は、学術研究を目的として、第 3 次調査：2018 年 4 月 27 日～5 月 16 日、第 4 次調査：2019 年 4 月 25 日～5 月 15 日の期間にそれぞれ実施した。
2. 出土した資料の整理作業は、千葉大学文学部考古学研究室の了承のもとに 2020 年 2 月 29 日まで実施した。
3. 概報の執筆は、長山明弘・廣田哲徳・柳澤清一・山谷文人が担当した。また概報作成に関わる作業の分担は以下の通りである。遺物の拓本・実測・写真撮影（柳澤）、遺構の写真撮影（箱石幸祐・藤原吉希・柳澤）、挿図のトレース、組版・編集（長山）、監修（山谷）。なお土層断面図については、第 3 次調査で岩城克洋氏が作成した写真によるデジタル原図を改編し、第 4 次調査で作成したマニュアル原図との統一を図った。
4. 第 3 次・第 4 次調査の実施から概報の刊行に至るまで、多くの方々にご指導・ご協力を賜った。ここに記して謝意を表す。島谷一昭（利尻富士町教育長）、佐藤雅彦・富岡森理（利尻町立博物館）、祐川イツ・石垣美奈子（地権者）、工藤昭二・川村一彦・若林吉武（自治会長）、藤沢隆史・高橋鵬成（礼文町教育委員会）、阿部明義（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）（順不同、敬称略）
5. 土層の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所色票監修（2001）『新版 標準土色帖』を使用した。
6. 発掘調査の参加者は以下の通りである。【第 3 次調査】：岩城克洋・折登祐介・折登亮子・北沙織・鹿田奨之・箱石幸祐・廣田哲徳・藤原吉希・柳澤清一（礼文・利尻島遺跡調査の会）、小山美喜夫（時事通信社 OB）、山谷文人（利尻富士町教育委員会）【第 4 次調査】：長山明弘・柳澤清一（礼文・利尻島遺跡調査の会）、高橋鵬成（礼文町教育委員会）、箱石幸祐（船橋市教育委員会）、山谷文人（利尻富士町教育委員会）

はじめに

礼文・利尻島遺跡調査の会による沼浦海水浴場遺跡の学術調査は、平成 28 年（2016 年）より令和元年（2019 年）まで 4 次にわたって実施された。第 3・4 次調査では、東西方向の遺跡構造について具に検討するため、従来の調査区より西側の地点（A3・4 区、B8～10 区、C2・3 区）を中心に調査している。また、北海道道 108 号杓形仙法志鷺泊線を挟んだより北側（内陸側）については、古地形や内水面の状況を知るため、F 地点に調査区を設定している。なお、F1 区については、令和元年 7 月 13 日に再発掘を行った。この際にマール堆積物と泥炭層の年代測定用試料採取のための地質調査が行われ、泥炭層の堆積が遅くとも 17～19 世紀初頭に終了していたことが判明している（近藤 2022）。

また、第 4 次調査については、最終年度であったことから、北海道市町村振興協会の「いきいきふるさと推進事業助成金」を活用した。事業名は「利尻富士町の文化遺産を生かした学び交流事業」とし、期間中に調査体験ボランティアの募集や調査見学の受入れなど、調査者と住民との学習機会の創出を図っている。また、遺構の現地保存の代替として調査壁面の剥ぎ取り作業を行った。この土層の標本は、カルチャーセンター・りっぷ館での展示に活用している。

なお、この報告では第 3・4 次調査の概要にとどめ、全体を通じた総括的な調査成果については、層位と遺物の整合性や年代観、理化学的な分析などを含めて、別の機会に改めて公表される予定である。

(山谷 文人)

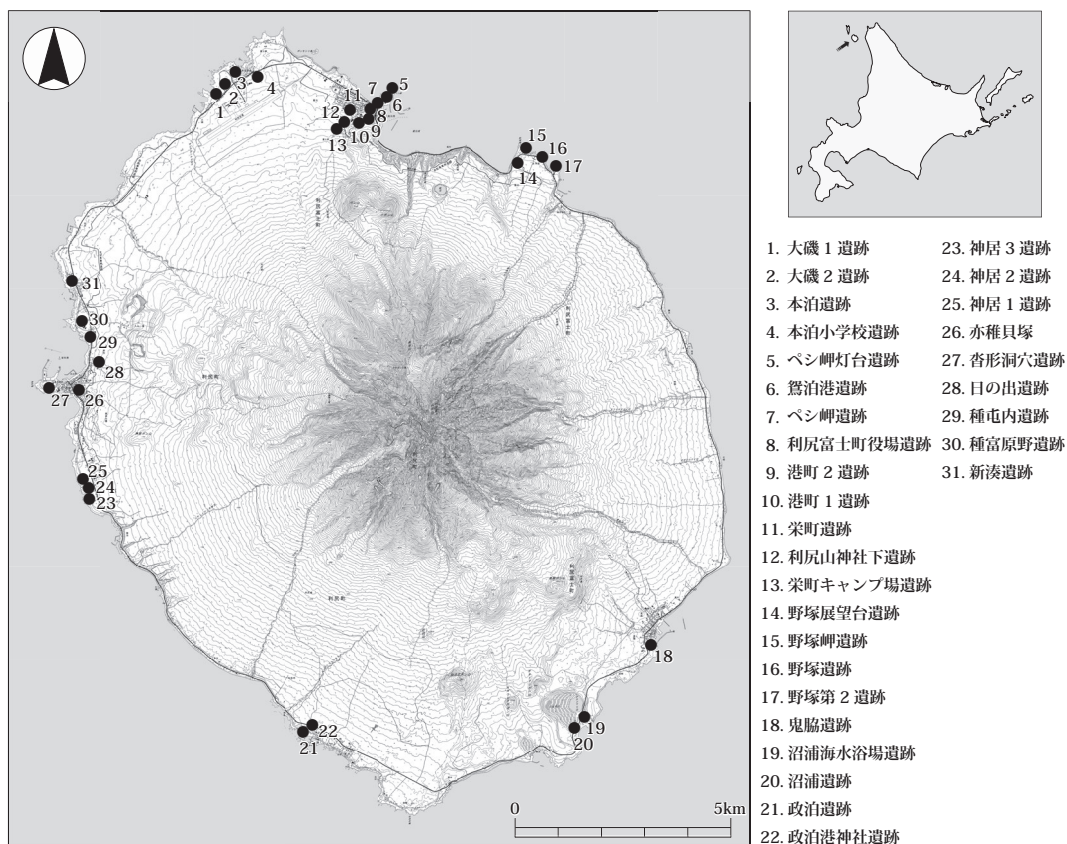


図 1 利尻島内の遺跡

(礼文・利尻島遺跡調査の会編 2018：第 1 図を参照し、国土地理院発行 電子地形図 25000「鷺泊」「雄志」に「鬼脇」「仙法志」をもとに作成)

I. 遺跡の概要

1. 遺跡の立地と環境 (図1・2)

沼浦海水浴場遺跡は、利尻島の南東部に所在する沼浦地区に位置しており、標高4～5mほどの砂浜海岸を有する平坦な砂丘上に立地している。沼浦地区は、アイヌ語で「ヲタトマリ」(砂浜のある入江)と呼ばれ、周辺には沼浦湿原やオタトマリ沼などの景勝地が広がっている。これらの湿原や沼の形成には、縄文海進による海水の流入と約4,000年前より以前に起きた海退が影響しているとされる。また、利尻山の火山活動の痕跡として、約7,000年前より以前に発生したマグマ水蒸気爆発による二度の噴火によって形づくられた瓢箪形のマール地形が認められる。

2. 遺跡の調査略史

ここでは沼浦海水浴場遺跡における主な調査の歴史を中心として説明を行う。その端緒は、明治時代の藤井 秀による遺物採集に発する。その後、昭和7年(1932年)に名取武光と後藤寿一による小規模な発掘が行われた。元々の沼浦地区は浜沿いに砂丘があり、盆地(集落側)にかけて緩い傾斜をなす地形であった。名取らによれば、その傾斜面から平地にかけては、方形の竪穴住居跡が5・6か所あり、また砂丘上には2か所の貝塚があったという(名取1933:5-6)。

昭和51年(1976年)には、周辺の本格的な分布調査が行われ、沼浦A遺跡(現、沼浦海水浴場遺跡)と沼浦B遺跡(現、沼浦遺跡)が確認されている(岡田ほか1984)。平成14年(2002年)には利尻富士町教育委員会による詳細分布調査が実施され、オホーツク文化期の包含層が検出されている(山谷・内山2004)。また平成28年(2016年)からは、礼文・利尻島遺跡調査の会による沼浦海水浴場遺跡の学術調査が行われている。(山谷)

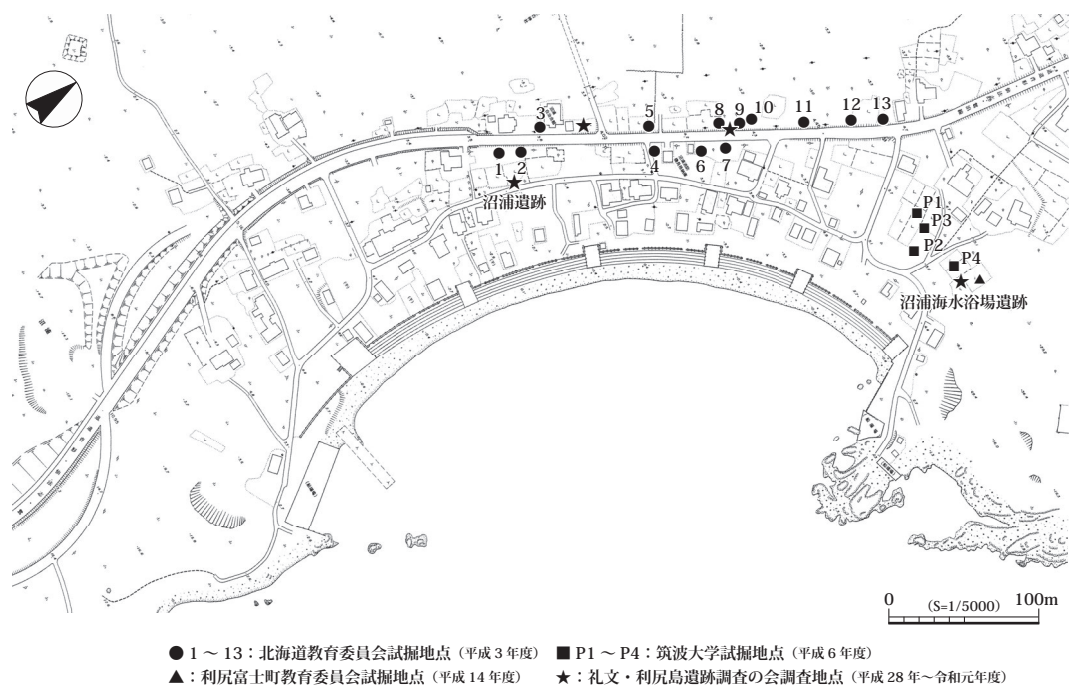


図2 遺跡周辺の地形と各調査地点の位置

3. 調査区の設定と経過（図2・3・4）

第3次調査 文化層の堆積状況をより広く捉えるために、C地点の2か所とA・B地点の3か所で19日間にわたって発掘を行った。C地点は筑波大学の試掘地点（P1～3）に当たる。P3に隣接してC2区（1.0×1.5m）、P2との間にC3区（1.0×1.5m）を設定し、C地点における土層堆積の概況を捉えた。A地点では、B7区とA2区の間にA3区（1.0×1.5m）、B7区の南北両側にB8区とB9区（2.0×2.0m）を新設し、段差を伴う区域間における土層堆積状況の統合的な把握を目指した。

第4次調査 A1区からB8区に至る地点の土層・文化層の堆積状況をより精密に捉え、貼付文系土器が混在する状態の再検証を目的として、既存区の中にA4区（1.0×1.5m）とB10区（1.5×2.0m）を新設した。10日間にわたり掘削を進め、攪乱層、人為的な整地層、安定した文化層からなる堆積状況を確認し、最下部では竪穴住居跡1基を検出した。また、かつて北海道教育委員会が試掘した道道108号線の北側に、F1・F2区（1.0×1.5m）を新設して調査した。F2区では、北海道教育委員会の試掘資料に対比される古い時期の元地式土器が僅かに検出され、A・B地点に先行するものとして注目された。

（柳澤 清一）

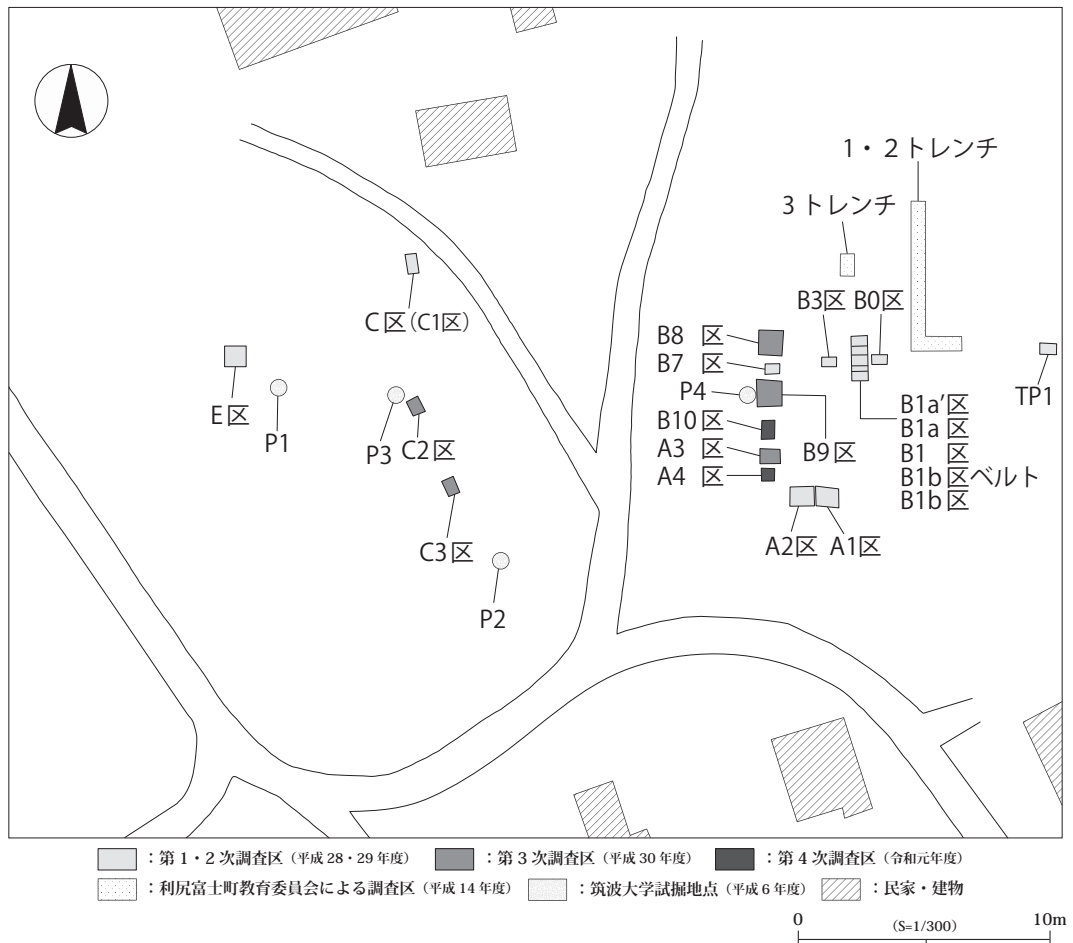


図3 A・B・C地点調査区配置図

I-3. 調査区の設定と経過

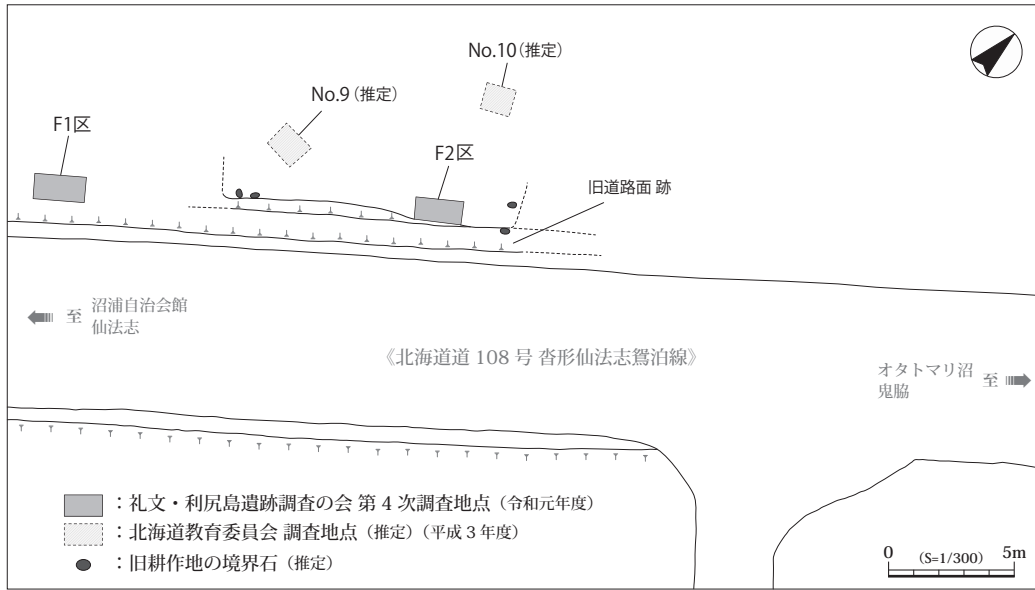


図4 F地点調査区配置図



写真1 第4次調査の参加者

4. 調査日誌

第3次調査 (2018年度: 4月27日～5月15日)

4月27日	金	晴	B8区: US101 掘削。C2区: US301 掘削
4月28日	土	晴	A3区: US01 掘削。B8区: US101、サブトレンチ掘削。B9区: US101、サブトレンチ掘削。C2区: US307・308 掘削。
4月29日	日	晴	B8区: US101・207、US207 下層掘削。B9区: US101・209・210 掘削。C2区: US309～312 掘削。
4月30日	月	曇のち雨	B8区: US207、US213～216 掘削。B9区: US101、US209～212 掘削。C2区: US313～315 掘削。
5月1日	火	晴	B8区: US213・214・217、US214 下層掘削。B9区: US101・209・219・220、US220 下層掘削。
5月2日	水	曇	B9区: US209・210、US210 下層掘削。C2区: US318・319 掘削。
5月3日	木	雨	雨天中止。
5月4日	金	曇のち晴	B8区: US216・217 掘削。B9区: US209、US221～225 掘削。C2区: US318・319・322・323 掘削。C3区: US320・321 掘削。
5月5日	土	曇のち雨	A3区: US20～22 掘削。B8区: US216(下層)、US217 掘削。B8区: US225、US225 下平坦面掘削。B9区: US225～227 掘削。C2区: US319・323 掘削。C3区: US321、324～326 掘削。調査を停止する。
5月6日	日	晴	休業日。
5月7日	月	曇のち晴	A3区: US20～22 掘削。B8区: US217・231・235・236 掘削。B9区: US230、US232～234、US237 掘削。
5月8日	火	晴	A3区: US22 掘削。B8区: US235・236、US236 下層掘削。B9区: US238～240、US240 下層、木質遺物片・炭化物を含む層掘削。
5月9日	水	晴	A3区: US22 掘削。B8区: US236・244 掘削。B9区: US242～245 掘削。
5月10日	木	曇	A3区: US23～26 掘削。B8区: 清掃、写真測量。C3区: 撮影・写真測量、埋め戻し。B9区: US245～247 掘削。C2区: 撮影・写真測量、埋め戻し。
5月11日	金	曇のち晴	A3区: US27～30 掘削。B8区: 清掃、写真測量。B9区: US247 掘削。
5月12日	土	晴	B9区: US247・248 掘削、清掃。
5月13日	日	雨	A3区: 雨天中止。B8区: 埋め戻し。B9区: 清掃。雨天のため中止。
5月14日	月	曇	A3区: US31・32 掘削、壁面撮影。B9区: 撮影・写真測量。
5月15日	火	雨	A3区: US31・32 掘削、撮影・写真測量、埋め戻し。B9区: 埋め戻し。

第4次調査 (2019年度: 4月26日～5月15日)

4月26日	金	晴のち曇	F1・F2区: 下草の刈り込み、トレンチ設定、平板測量。
4月27日	土	晴	F1区: 1～5層掘削。F2区: 1～3層掘削。
4月28日	日	晴	B10区: 1～3層掘削。F1区: 壁面清掃、作図準備。F2区: 1～3層掘削。
4月29日	月	曇	A4区: 1～3層掘削。F1区: 断面清掃、作図準備。F2区: 4層掘削、壁面清掃、断面図作成。
4月30日	火	晴	A4区: 3層下部、4層掘削。
5月1日	水	晴	A4区: 4・5層掘削。B10区: 2・3層掘削。
5月2日	木	雨	雨天休業。
5月3日	金	曇のち晴	A4区: 5～6層上面掘削。B10区: 4～6層掘削。F1区: 湧水に伴う水抜き作業、光波測量、写真撮影、遺物取り上げ、埋め戻し。F2区: 湧水に伴う水抜き作業、光波測量、写真撮影、木質遺物取り上げ、埋め戻し。
5月4日	土	晴	A4区: 6層掘削。B10区: 6・7層掘削。
5月5日	日	晴	A4区: 7層掘削。B10区: 8層、9層(木質遺物層)掘削。植物遺体の検出状況図作成。
5月6日	月	晴のち雨	A4区: 7層、8・9層上部掘削。B10区: 9層掘削。
5月7日	火	雨のち晴	A4区: 9層下部掘削、竪穴住居跡の周溝検出。B10区: 9・10層掘削。
5月8日	水	晴	A4区: 竪穴住居跡の床面露出、壁面清掃。B10区: 9～11層掘削。
5月9日	木	曇	A4区: 写真撮影、竪穴住居跡の平面実測、断面図作成。
5月10日	金	雨のち曇	A4区: 断面図作成、竪穴住居跡の床面検出、写真撮影、埋め戻し。
5月11日	土	曇のち晴	A4区: 断面図作成、床面清掃、写真撮影、埋め戻し。B10区: 写真撮影、断面図作成。
5月12日	日	晴	B10区: 10～12層掘削、断面図作成、平板測量。
5月13日	月	晴	B10区: 東壁土層断面の剥ぎ取り、遺物収納、平板測量。竪穴住居跡の写真測量。

第4次調査（2019年度：4月26日～5月15日）

5月14日 火 晴 B10区：竪穴住居跡の写真測量。
5月15日 水 晴 B10区：埋め戻し。

5. 概報の範囲と遺物の記載、土器の分類について

本書では、第3・4次調査で出土した遺物を選択して記載する。特に土層の堆積特性を示すもの、各文化層の内容を代表すると考えられる資料を優先的に図示、または写真として示す。動物遺存体をはじめ、理化学的な分析を必要とする各種の資料については、現在分析を依頼しており、本報告で提示する予定である。したがって、これらについてはすでに速報されている分析結果を含めて、今回の報告では言及しない。

最も出土数の多い土器類については、第3・4次の調査でも多様なものが出土している。できる限り記載上の一貫性を維持するため、本書では第1・2次調査の報告における土器分類を改訂し、項目を適宜に追加して用いる。変更部分については**ゴシック体**で示す。

土器の分類にあたっては、文様構成や器形・胎土・調整の違いを基準として大きく5群に分け、各群の特徴によってさらに細かく分類した。このうち多数を占めるIV群の細分は、記載上の便宜を優先したものである。このため各類別は複数の時期にまたがる場合があり、また異系統と考えられる資料を含んでいる。

なお、挿図の傍らに示した各資料の分類表記（例：IV4-bなど）のうち、疑問の余地があるもの（例：図22-155など）については、（ ）付きで暫定的に記している。（柳澤）

《土器の分類》

I 群 縄文土器

II 群 続縄文土器

III 群 所謂「鈴谷式」系統の土器

IV 群 「オホーツク式」系統の土器

1 類：突瘤文、突 帯などを施 すもの	a：突瘤文・貫通孔のみ b：突瘤文とその他の文様 c：突帯（旧7類） d：その他の文様 e：胴部文様のみ
2 類：刻文・スタ ンプ文など を施すもの	a：刻文のみ b：刻文とスタンプ文・指押文・ 刺突文・凹線文など c：スタンプ文・刺突文 d：円形刺突文
3 類：爪形文・刺突 文・刻み目文・ 指押文などを 施すもの	a：押捺するもの b：捻りを加えるもの c：刺突文・刻み目文 d：指押文
4 類：沈線文・凹線 文などを施す もの	a：平行沈線または沈線文・凹線 文のもの b：刻文・刺突文・各種の沈線文 c：縦沈線を施すもの

IV 群 「オホーツク式」系統の土器

4 類：沈線文・凹線文などを施すもの	d：矢羽根状の沈線文 e：斜格子沈線文 f：沈線とその他文様 g：斜行沈線文または鋸歯状文を施すもの h：波状凹線文 i：ポッチ（低平の小突起）のみ
5 類：貼付文を施すもの	a：擬縄貼付文 b：直線・波状ソーメン文 c：ネットソーメン文 d：捻りもしくは押圧を加えるもの e：貼付文・ポッチ・ボタン状のもの f：太い貼付文のもの g：沈線・擬縄貼付文
6 類：摩擦式浮文を施すもの	a：摩擦式浮文のみ b：他の要素を有する摩擦式浮文 c：凹線による摩擦式浮文、その他の要素を有するもの
8 類：薄手で無文のもの	a：胴部 b：底部 c：口縁部
9 類：やや厚手のもの	a：刻文 b：貼付文 c：摩擦式浮文 d：無文 e：沈線文・凹線文 f：スタンプ文 g：底部
10 類：厚手のもの	a：沈線文・凹線文 b：スタンプ文 c：突帯文 d：無文 e：摩擦式浮文 f：口唇部文 g：底部
V 群 擦文土器	a：甕形 b：坏形 c：壺形 d：模倣的なもの e：その他 f：底部

II. 各区の調査概要

1. A4区 (A・B地点)

(1) 概要 (図3)

A4区は、A3区(第3次調査)の南側に隣接し、A1・2区(第1次調査)の北西方向に位置する。第4次調査で1.0×1.0mの調査区を設定した。最下部から検出された竪穴住居跡については、A1・2区とB10区でも確認されており、その規模がおおよそ明らかになっている。この竪穴住居跡は、長軸(南北)9m、短軸(東西)6m程度と推定され、時期は出土遺物から十和田式期に比定される。

(2) 層序と出土遺物 (図5～8, 表1, 写真2～4)

- 2～4層 暗褐色砂層で、I～V群の土器片や近現代の遺物が混在している。4層最下部では、硬化面が検出されている。
- 5層 IV群土器に混じって、陶磁器片(図7-17、写真3a・3b)が出土している。
- 6層 貝類(イガイ、アワビ、ホッキ)を密に含み、タラなどの魚骨、ウニ類、獣骨(イヌ)・海獣骨なども含まれる。南北方向の範囲で10～20cm大の礫と長さ10cm前後の鉄釘が5点出土している。最下部には木質遺物層がブロック状に認められる。
- 7～8層 しまりのある黒褐色砂層で、出土遺物は少量だがIV・V群土器が出土している。
- 9層 竪穴住居の覆土で、IV群の十和田式に比定できる若干の土器片が出土している。
- 10層 黄褐色砂礫層で、住居跡の貼床に相当する。住居跡の壁沿いに周溝がめぐらされ、柱穴と考えられるピットが2基検出されている。北端部の床面直上より、金属製鏃(写真4b)と石斧が各1点出土している。(山谷)



写真2 A4区北壁土層断面

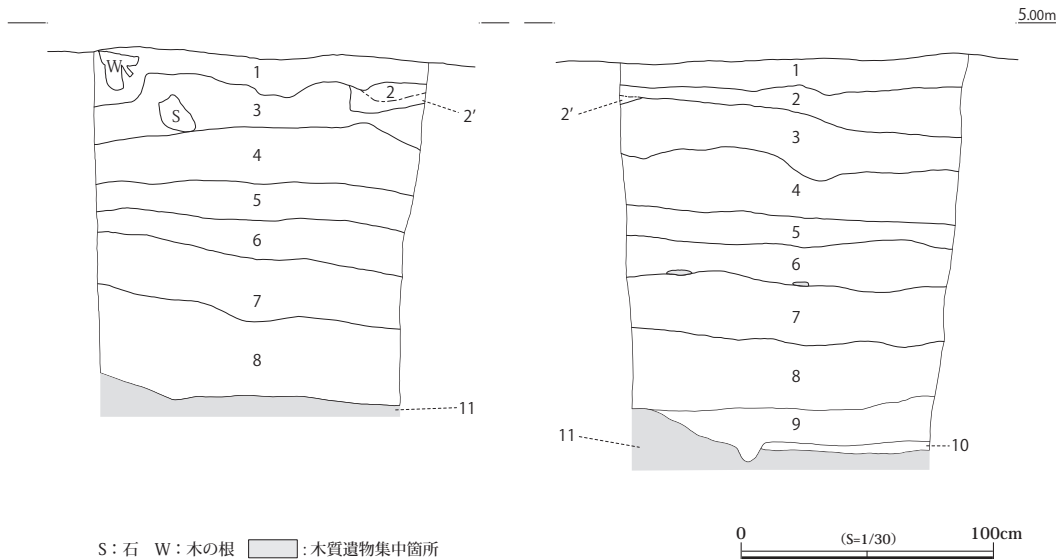


図5 A4区西壁・北壁土層断面図

表1 A4区土層観察表

層序	土層名(色調)	土層の特徴
1層	暗褐色土層 (10YR2/2)	表土。草木の根などを多く含む。近現代遺物が出土している。
2層	暗褐色砂層 (7.5YR2/2)	しまりあり。褐色粒を少量含む。下部(「2'層」)では、一部で小砂利を含む層相となる。
3層	暗褐色砂層 (10YR4/2)	しまりやや弱。流れ込みやブロック状になった魚骨を伴う。褐色粒、炭化物を少量含む。
4層	暗褐色砂層 (10YR3/4)	しまり弱、粘性弱。褐色粒、炭化物を少量含む。
4層 (最下部)	極暗褐色砂層 (7.5YR2/3)	しまり強。層厚約2cmの硬化面を検出。南から北に向かって傾斜し、僅かに炭化物を含む。
5層	黒褐色砂層 (10R3/1)	しまり弱。赤色粒、炭化物を少量含む。上位では魚骨ブロックを含むが下位では魚骨を含まず、北に向かって傾斜する。北壁の裾付近で陶磁器片が出土している。
6層	魚骨層 (5YR2/4)	しまりややあり。上面で斑状に広がる硬化面を検出。この硬化面より下位では魚骨、ウニ類を密に含み、獣骨、貝片、炭化材を伴う。下層も上面と同じく北に向かって傾斜し、しだいに層厚を増す。各種の和釘が出土したほか、樹皮や炭化材などを検出。最下部ではA3区で確認された木質遺物層の痕跡(ブロック状)を確認した。
7層	黒褐色砂層 (7.5YR1/3)	しまり強。遺物は少なく、被熱した小さな骨片、炭化物、木材片を少量含む。
8層	黒褐色砂層 (7.5YR2/3)	しまりあり。炭化材を多量に含む。
9層	暗茶褐色砂質土層 (10YR2/3)	竪穴住居跡と周溝の覆土である。炭化物と小礫、球状の赤色砂を含む。しまりやや弱。
10層	黄褐色砂礫層 (10YR4/4)	転圧された硬質な貼床面である。小・細礫を多数含み、角礫も伴う。しまり強。
11層	暗茶色砂層 (10R3/2)	竪穴住居跡の構築面である。小さな土塊や砂塊を含む。粘性弱。しまりは斑状に強弱を示す。

II. 各区の調査概要



写真 3a 土器・陶磁器の出土状況 (北壁)



写真 3b 土器・陶磁器の出土状況(拡大)

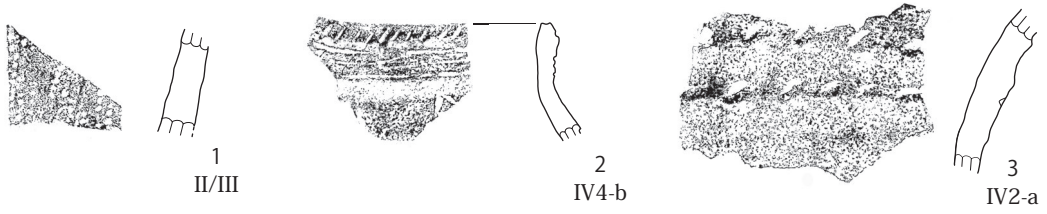


写真 4a 西壁の土層堆積と竪穴住居跡の検出状況

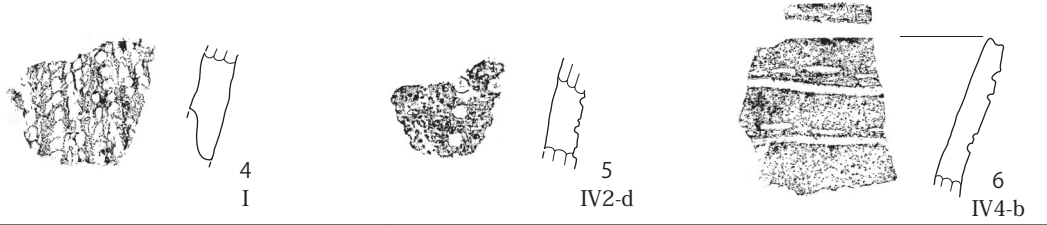


写真 4b 竪穴住居跡の検出状況と床面出土の金属製鏃

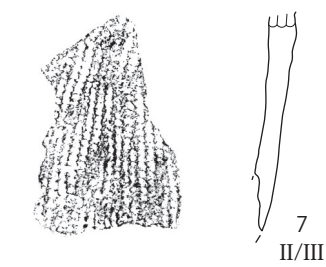
1層



2層



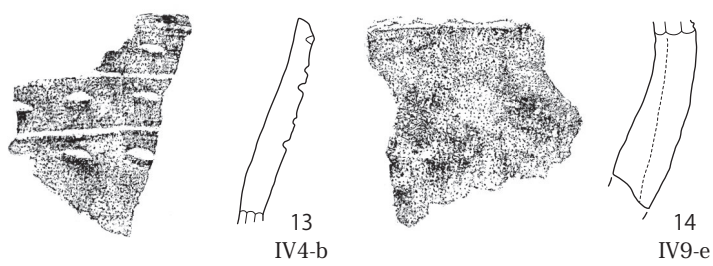
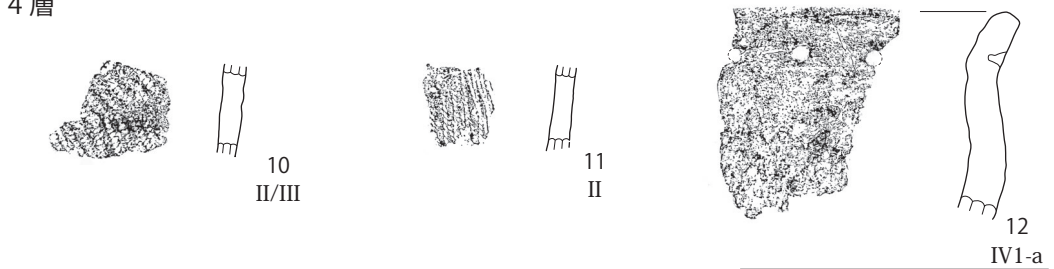
3層上面



3層下部



4層



4層硬化面

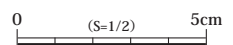


図6 A4区出土土器(1)

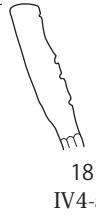
II. 各区の調査概要

4層硬化面



16
III

5層



18
IV4-a



19
(II)



17



20
IV4-f

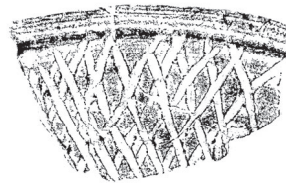


21
IV10-d

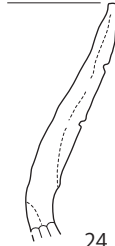
6層上面



22
IV9-d

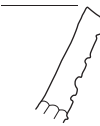


23
V-a



24
IV4-a

6層



25
IV4-b



26
IV9-d

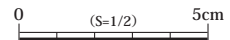


図7 A4区出土土器(2)

7層



27
IV4-a

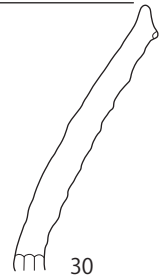


28
V-a

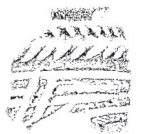
7層下部



29
IV4-b



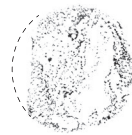
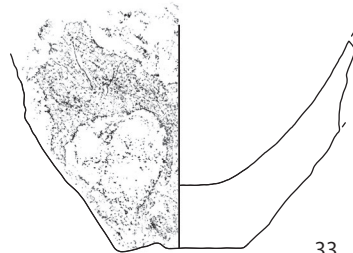
30
IV6-b



31
V-a



32
IV2-a

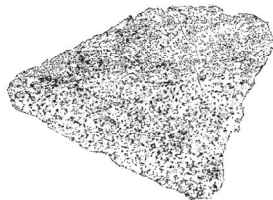


33
IV10-g

8層



34
IV2-a



35
IV8-b

竪穴住居跡床面



36
IV9-d

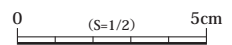


図8 A4区出土土器(3)

2. A3区 (A・B地点)

(1) 概要 (図3)

A3区は、A4区とB10区(第4次調査)の間に位置している。第3次調査で1.0×1.5mの調査区を設定し、深さ1.3mまで掘削した。

(2) 層序と出土遺物 (図9～12, 表2, 写真5～8)

US1～US21 (1～3層)

暗褐色砂層で、II～IV群の土器片や近現代遺物が混在している。

US22～US30 (4～12層)

黒褐色砂層と魚骨層の互層で、ここでもII～IV群の土器片が出土している。当初の層位の観察段階では、オホーツク文化期における短期的な食料残滓の廃棄サイクルを表わすものとも考えられたが、続縄文文化からオホーツク文化期に至る土器の混在状況や周囲の所見から、近世以降の漁場開発などに伴う二次的な堆積物であると判断した。

US31 (13・13-14層)

木質遺物層でIV群を主体とした土器片が得られている。同層からは、用途不明の両端に孔が穿たれた弓形状の金属と思われる製品(写真7)、透明な釉のかかった薄手の陶磁器片(写真8)なども出土している。これらがIV群土器の時期に付随するものなのか、あるいは後世の所産なのか、また木質遺物層の形成にかかわる遺物なのかも含めて、現時点では判然としていない。沼浦海水浴場遺跡の性格や位置づけにかかわるポイントと捉えられる遺物であり、材質や年代測定なども視野にいれながら、今後の分析による見解をもって、調査全体のまとめの際に改めて検討しなければならないものと考えている。

US32 (14層)

黒褐色砂層でIV～V群の土器片が得られている。A3区については、遺物の出土がみられなくなったUS32(14層)の上面で調査を終えている。

(山谷)

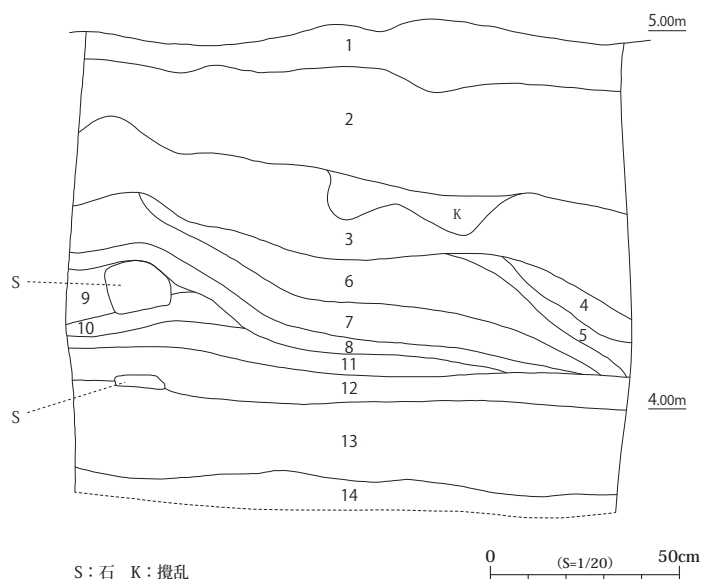


図9 A3区北壁土層断面図



写真5 A3区北壁土層断面

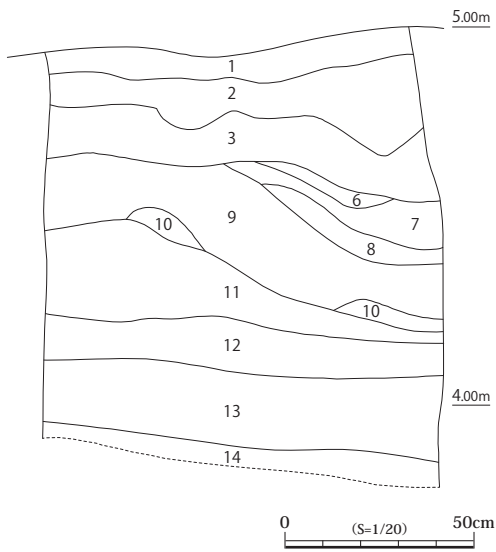


図10 A3区西壁土層断面図



写真6 A3区西壁土層断面

表2 A3区土層観察表

層序	土層名 (色調)	土層の特徴
US01 (1層)	暗褐色土層 (10YR2/2)	しまり弱。草木の根などを多く含む。近現代遺物が出土。
US20 (2層)	暗褐色砂層 (7.5YR2/2)	しまりやや弱。攪乱を伴ない、近現代遺物を含む。
US21 (3層)	暗褐色砂層 (10YR3/4)	西壁と北壁側では堆積に乱れがあり、二次的な混合を伴う不安定な層相を示す。しまり、粘性弱。
US22 (4層)	ウニ殻・魚骨層 (1) (10YR2/2)	北・東壁側に分布し、急激に傾斜堆積する。しまり・粘性弱。ウニ殻と魚骨を多く含む。海獣類の大型骨を伴う。
US23 (5層)	黒褐色砂層 (7.5YR2/2)	東壁側に傾斜堆積する。しまり・粘性弱。
US24 (6層)	ウニ殻・魚骨層 (2) (10YR3/3)	北壁側にのみ堆積する。東壁寄りでは傾斜堆積する。しまり・粘性弱。魚骨、ウニ殻を多く含む。
US25 (7層)	黒褐色砂層 (7.5YR2/2)	US23 (5層) に近似する間層である。しまり・粘性弱。
US26 (8層)	ウニ殻・魚骨層 (3) (7.5YR2/2)	極暗褐色の砂が目立つ。しまり・粘性弱。魚骨と破砕細片のウニ殻を伴う。
US27 (9層)	黒褐色砂層 (10YR2/3)	さらさらとした砂層で、北壁と東壁側に向かい急激に傾斜堆積する。しまり・粘性弱。
US28 (10層)	ウニ殻・魚骨層 (4) (10YR3/4)	US26・27 (8・9層) 下の北西壁側に離れて堆積する。魚骨とウニ殻を含む。しまり・粘性弱。
US29 (11層)	黒褐色砂層 (7.5YR2/2)	全域に分布する。北東に向かい、緩やかに厚く傾斜堆積する。大型の魚骨を伴う。しまり・粘性弱。
US30 (12層)	暗褐色砂層 (10YR3/4)	中央から緩やかに東壁側へ傾斜堆積する。土粒を含み、保存状態の良い海獣骨・魚骨を伴う。しまり強、粘性あり。
US31 (13層)	ウニ殻・魚骨層 (5) (7.5YR2/3)	東方向に緩やかに傾斜し、全域に堆積する。魚骨、ウニ殻を多く含む。獣骨も相当量を伴う。しまり・粘性弱。
US31 最下部 (13-14層)	木質遺物層 (面) (10YR3/1)	全域に分布し、東壁方向に緩やかに傾斜する。層厚 1cm 前後、しまり強、粘性弱。上面で陶磁器・金属製品を検出。
US32 (14層)	黒褐色砂層 (7.5YR3/1)	しまり中、粘性弱。骨片、炭化物を僅かに含み、散漫に遺物が出土する。



(遺構写真：縮尺不同)

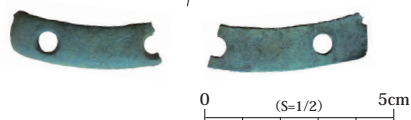


写真7 南西隅における有孔金属製品の出土状況 (木質遺物面直上)



写真8 西北隅における施釉陶磁器片の出土状況 (木質遺物面直上)

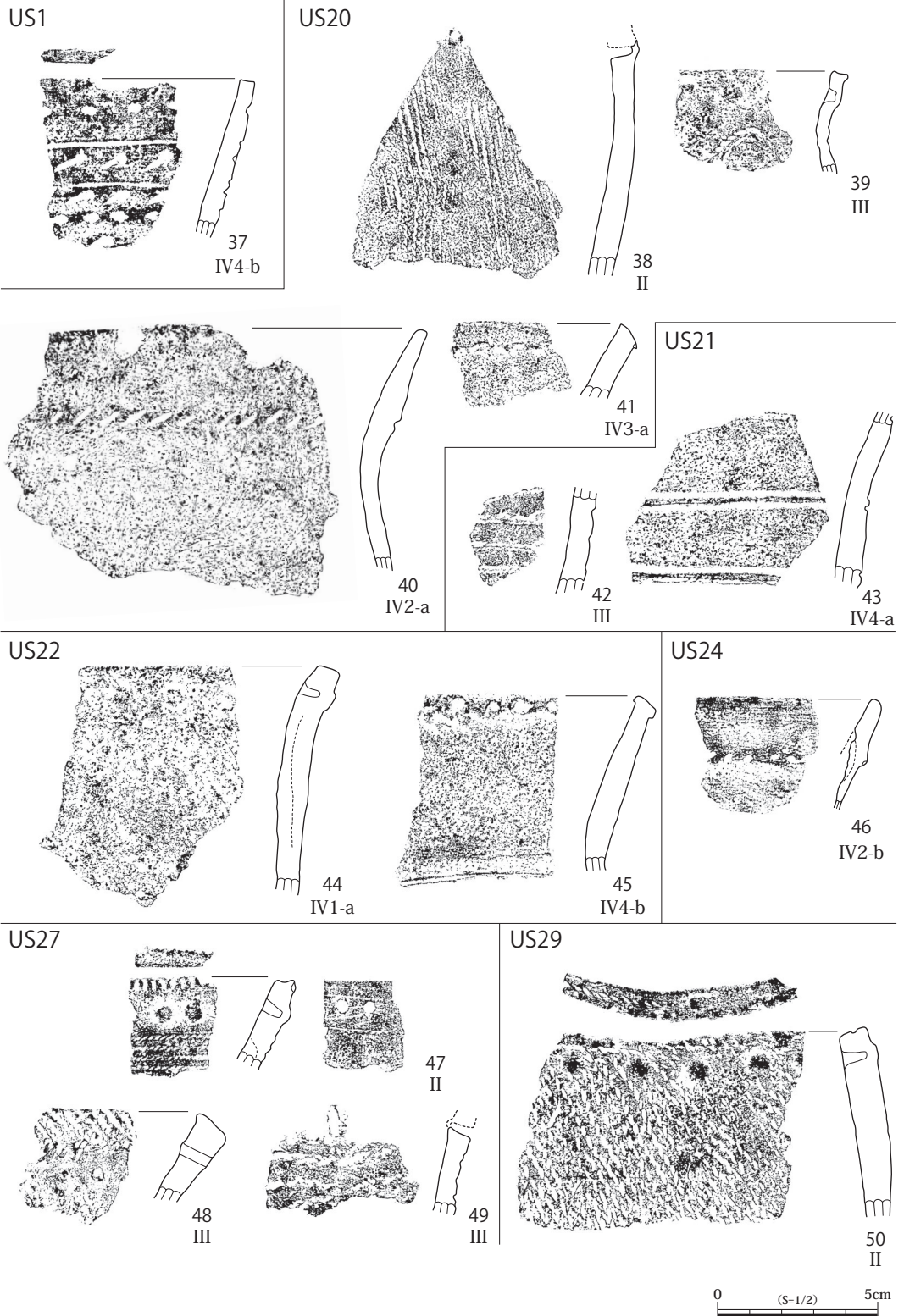
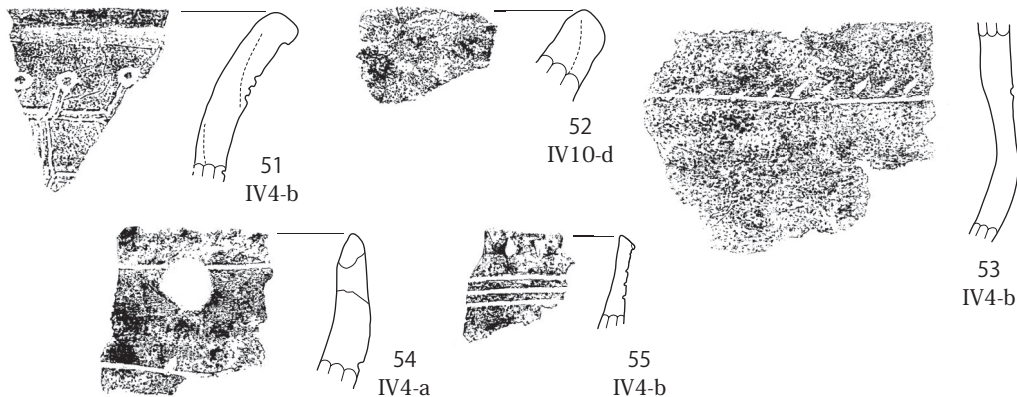
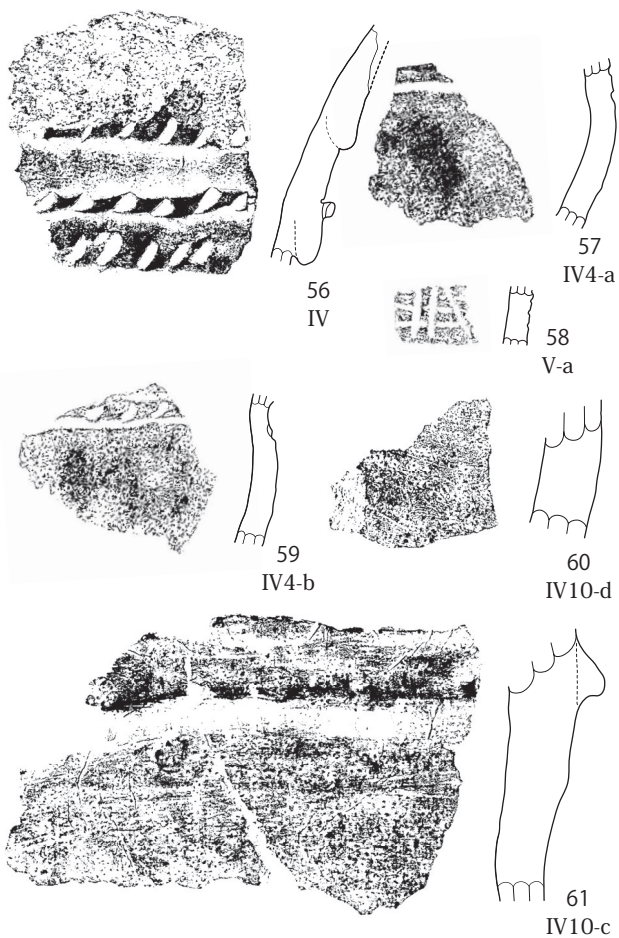


图 11 A3区出土土器 (1)

US 31 (上部)



US 31 (下部)



US 32

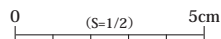
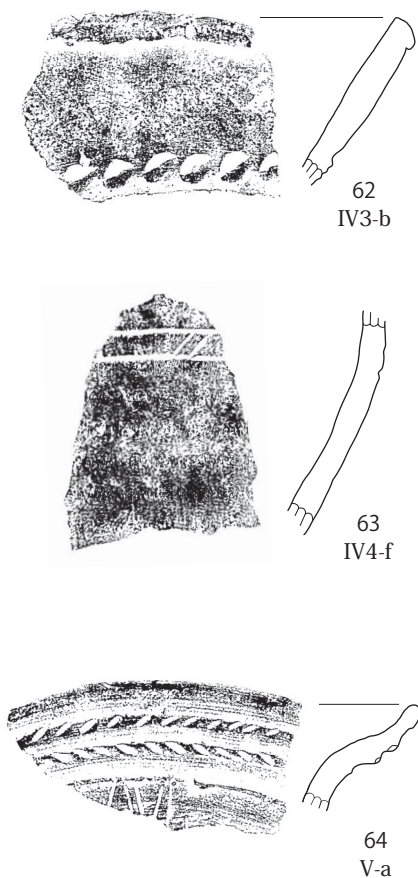


图 12 A3区出土土器 (2)

3. B10区（A・B地点）

(1) 概要（図3）

B10区は、第3次調査で発掘したA3区の北側、B9区の南側に隣接する。第4次調査において1.0×2.0mの大きさに調査区を設定した。

(2) 層序と出土遺物（図13～16,表3,写真9～16）

- 1層 草木の根が多く混入する。III・IV・V群土器、近現代遺物などが混在する。
- 2層 黒褐色砂層。北西隅で近世以降の方形木棺墓と推定される遺構が確認された。この遺構については、北壁より50cmの幅で掘削を停止しそのまま残すこととした。
- 攪乱層 近現代の造成による砂層。2つに分かれる。黄褐色粘質土や5cm大の角礫を含む。
- 3層 獣骨・魚骨、ウニ棘、貝類を多量に含む。下位では小型の巻き貝がやや目立つ。堆積は西壁側で薄く、中央や東壁側で厚い。最も厚い部分では約20cmあるが、壁面には現れない。II群・IV群土器、薄手の施釉陶磁器などを検出した。
- 4層 灰褐色砂層。下位では獣骨・魚骨、ウニ殻・棘などが目立つ。土器の出土はあまり多くない。足袋の^{こはざ}と推定される金属製品を2点検出した。
- 5層 獣骨片や破砕貝を含む暗灰黄色砂層である。調査区全体には広がらない。上位及び下位にウニ殻がやや目立つ。
- 6層 硬く締まったオリーブ黄色砂層で、硬化面となっている。北壁から東壁の一部では上面に長軸70cm×短軸40cmほどの範囲で炭化物が広がっていた。この炭化物の厚みは1cm以下で、その下は暗灰色砂層、さらに下位に硬化面が続く。
- 7層 6層と同様に硬く締まった砂層である。6層よりもやや暗めの色調を呈する。
- 8層 やや大型の獣骨、魚骨、ウニ殻・棘、破砕貝などを含む貝層である。調査区の南東際で、上面に貼り付くように比較的大きな土器片、IV群9類やV群土器の破片が出土した。ただし全体的に数量は少なく、摩滅したものが目立つ。
- 9層 木質遺物層。木質は一部が重なって検出されているが、出土状態に明確な規則性は認められなかった。また木質には外皮付きで生木状のものと炭化したものがあり、魚の薄い鱗が多数付着していた。木質部分より下位では土の粘性が増し、しまりも強くなる。この木質遺物層は、A3区からB9区にかけて連続すると考えられる。9層直上の西壁付近で、寛永通宝、和釘などの金属製品を検出した。
- 10層 暗灰黄色砂層。上部は粘性、しまりとも強い。下部では減じ、直径5cm大の角礫、炭化物が若干混じる。土器片は小さいものが多い。10層以下の11～13層は、東壁の南際付近で確認したもので南壁のセクション（写真10）には現れない。
- 11層 10層下位で茶褐色砂の塊が2か所認められた。厚さは約10cmで、明瞭な形を成さない。この塊のすぐ下から貼床（13層）を検出している。
- 12層 東壁の南際で検出された柱穴の覆土である。柱穴は貼床の脇から掘り込まれ、深さは50cm以上ある。
- 13層 貼床面。直径5～10cm大の礫、11層と類似する茶褐色の砂、粘質土などで構成される。
- 14層 非常に硬くしまりのある砂層で、削るとしゃりしゃりと音がする。基盤に相当する。周溝が2条めぐり、内側のものはやや幅が狭く浅い。

（長山 明弘）

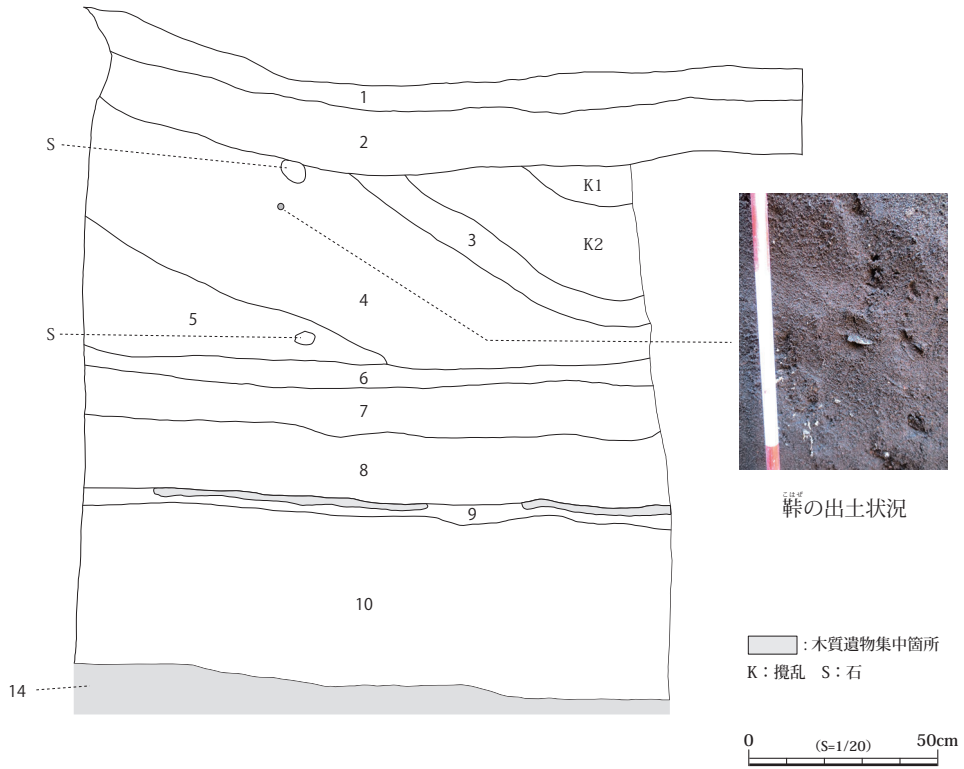


図 13 B10 区西壁土層断面図



写真 9 B10 区西壁土層断面



写真 10 B10区南壁土層断面

表 3 B10区土層観察表

層序	土層名 (色調)	土層の特徴
1層	褐色砂層 (7.5YR4/3)	小礫・砂で構成され、しまり、粘性弱。草木の根を多く含む。
2層	黒褐色砂層 (5YR3/1)	小礫・砂で構成され、破砕貝、獣骨片が混じる。しまりあり。粘性弱。草木の根を多く含む。
攪乱層 (1)	黒褐色砂層 (5YR3/1)	獣骨、ウニ殻、破砕貝のほか直径2～5mmの小礫を多量に含む。南壁の途中から西壁には現れない。しまり、粘性弱。近現代遺物を伴う。
攪乱層 (2)	褐灰色砂層 (5YR4/1)	直径2～5mmの小礫(オリーブ黄色が目立つ)を多量に含み、炭化物、破砕貝を若干伴う。南壁でやや厚く、東・北壁へ連続し、西壁の途中で収束する。しまり、粘性弱。
3層	灰褐色砂層 (7.5YR4/2)	多量の破砕貝、ウニ殻・棘、獣骨、5cm大の角礫を稀に含む。しまり、粘性弱。
4層	灰褐色砂層 (10YR4/2)	さらさらとした砂層。炭化物、オリーブ黄色の粘土塊 (5Y5/3) が混じる箇所あり。南・西壁で厚みがある。しまり、粘性弱。
5層	暗灰黄色砂層 (2.5Y5/2)	ウニ殻、破砕貝を含み、部分的にオリーブ黄色の粘土塊 (5Y6/3) を伴う。南・西壁の一部で厚みがある。
6層	オリーブ黄色砂層 (5Y6/4)	硬質の砂層(硬化面)。北・東壁の途中まで、上部1cmの厚さで灰と炭化物の堆積が認められる。しまり強、粘性弱。
7層	黒褐色砂層 (10YR3/1)	6層と同様の硬質砂層。獣骨、破砕貝の微細片を含む。しまり強、粘性弱。
8層	ウニ殻・破砕貝層 (7.5YR3/1)	獣骨・魚骨、ウニ殻・棘、破砕貝を多量に含む。部分的にオリーブ黄色の粘土塊 (5Y6/3)、直径5cm大の礫を若干含む。しまり、粘性弱。
9層	木質遺物層 (10YR3/1, 7.5YR3/2, 2.5YR6/6)	上位数cmの厚さで木質遺物が平面的に分布。その下では腐植質を含む粘性の強い土層となる。植物遺体の隙間などに魚の鱗を多数検出。
10層	暗灰黄砂層 (2.5Y5/2)	上部ではしまり、粘性あり。下部ではしまり、粘性とも弱い。また直径5cm大の角礫、炭化物が若干混じる。土器片は小さいものが多い。
11層	黄褐色砂層 (2.5Y5/4)	10層中に2か所の円塊として含まれる。さらさらとした砂のみで構成される。
12層	黒褐色砂層 (10YR3/3)	柱穴の覆土である。しまり、粘性なし。
13層	貼床面 (5Y6/3, 2.5Y5/4)	オリーブ黄色 (5Y6/3) の粘土、直径1～3cm大の小礫、稀に直径10cm大の角礫から構成される。壁面には現れない。
14層	灰オリーブ砂層 (5Y6/2)	非常に硬く締まった砂層である。色調はやや白味がかり、削るとしゃりしゃりと音がする。基盤の地山面に相当。

II. 各区の調査概要



写真 11a 大型土器片の出土状況 (8層上面)



写真 11b 大型土器片の出土状況 (拡大)



写真 12a 寛永通宝の出土状況 (9層直上)



写真 12b 鉄製品の出土状況 (9層上面)



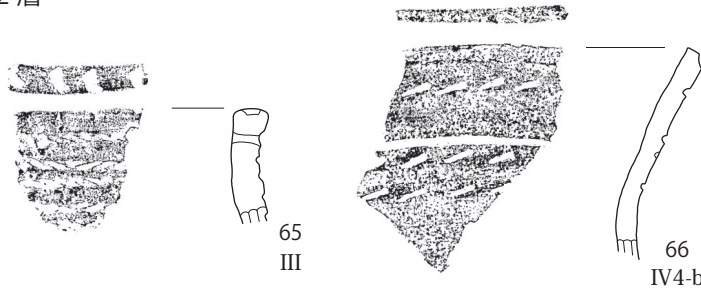
写真 13 木質遺物 (大型植物遺体) の検出状況 (9層上面)



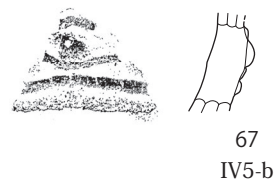
写真 14 竪穴住居跡の検出状況 (14層上面)

II. 各区の調査概要

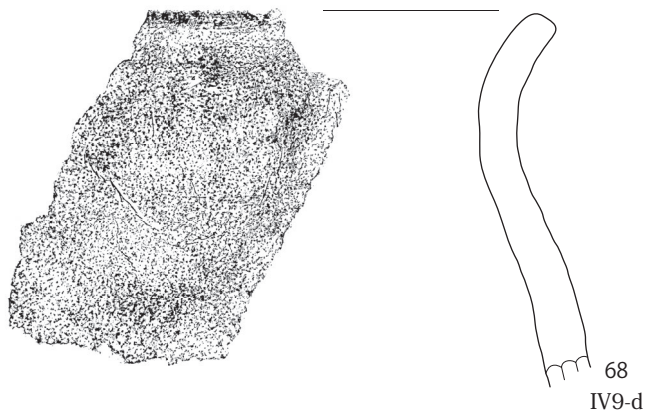
2層



攪乱層 (1)



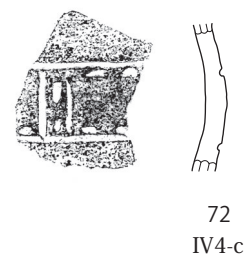
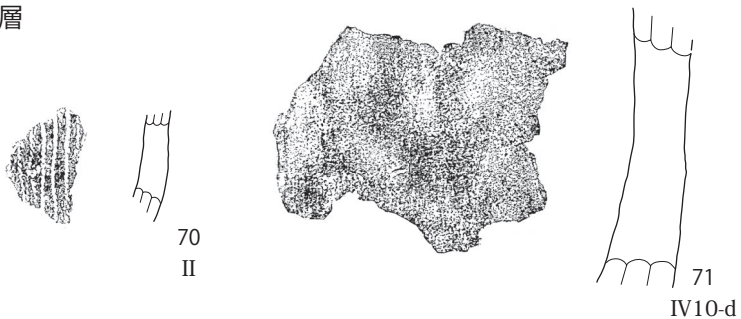
攪乱層 (2)



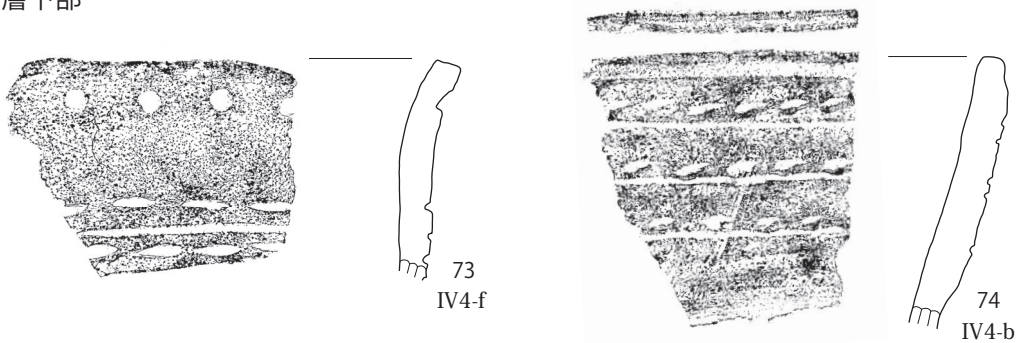
3層最上部



3層



3層下部



0 (S=1/2) 5cm

図14 B10区出土土器(1)

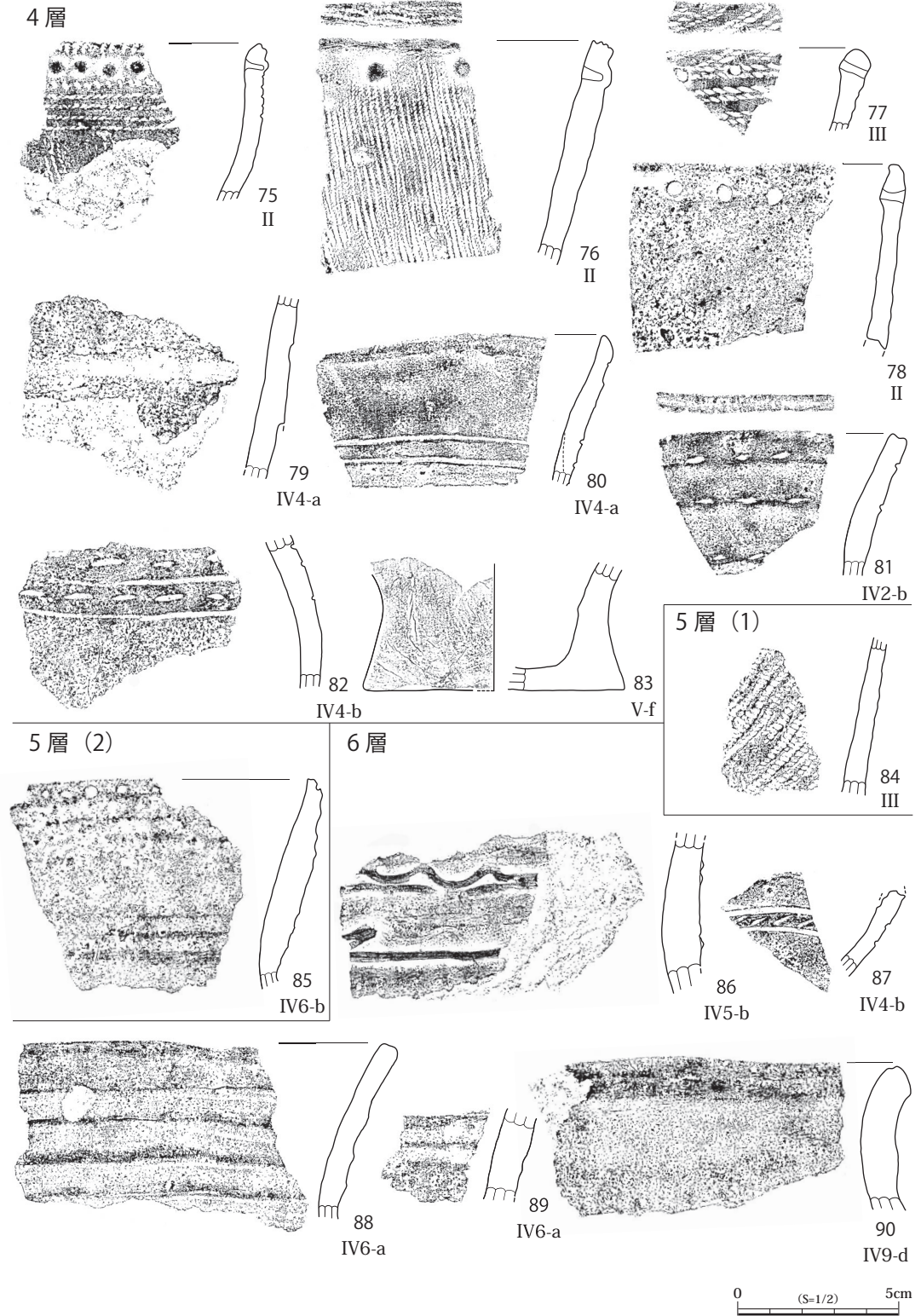


图 15 B10区出土土器 (2)

II. 各区の調査概要

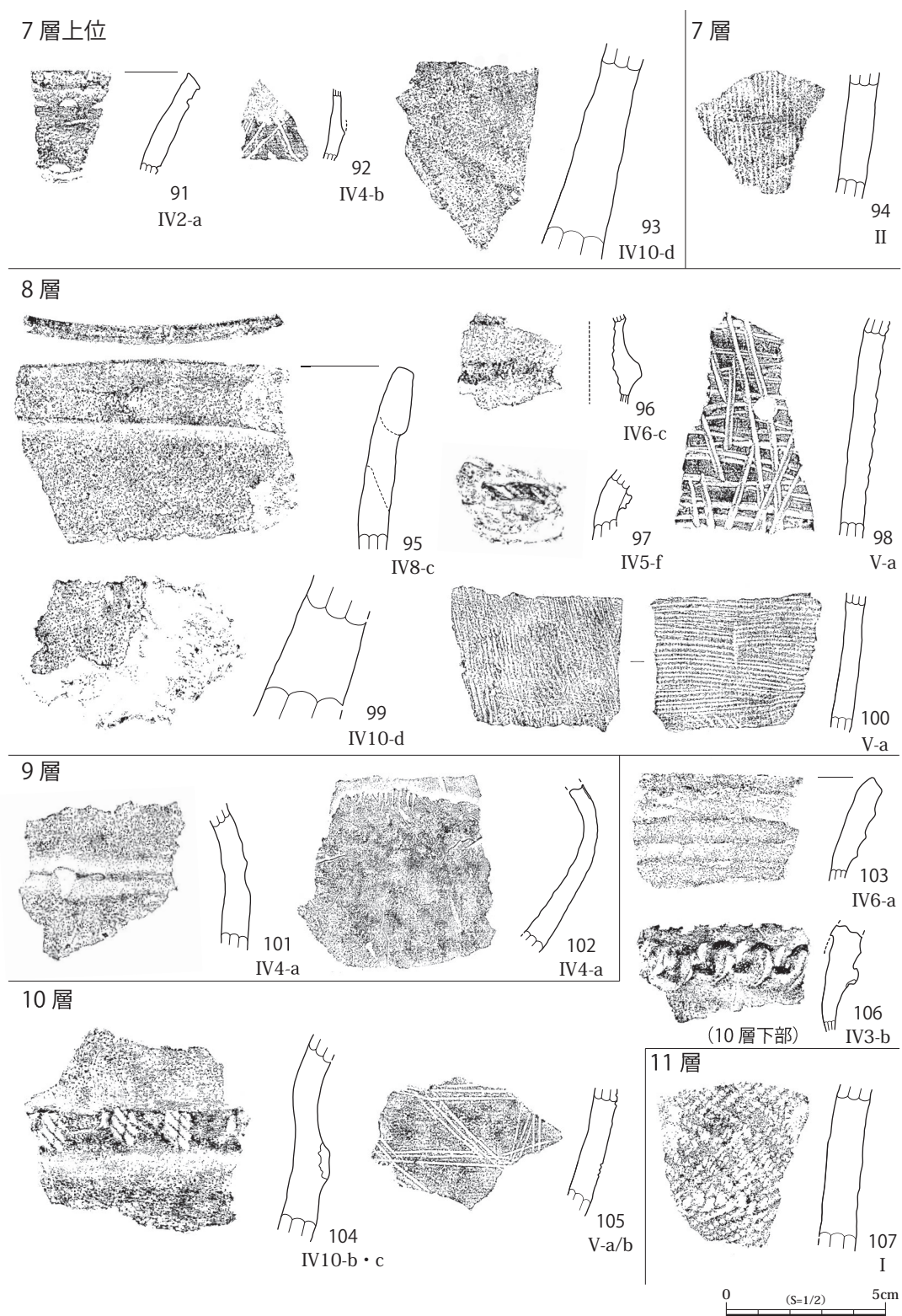


図16 B10区出土土器(3)



写真 15 B10区出土の金属製品 (1)



写真 16 B10区出土の金属製品 (2)

4. B9区 (A・B地点)

(1) 概要 (図3)

B9区は筑波大学の試掘地点P4に隣接し、B10区の北側、B7区(第2次調査)寄りに位置する。B7区下層から出土した土器群の層位的な出土状況を検証するため、第3次調査で2.0×2.0mのトレンチを設定し、深さ約1.8mまで掘り下げて調査を終了した。

(2) 層序と出土遺物 (図17～20, 表4, 写真17・18)

B9区は、土層の特徴とB10区との対比にもとづいて、上層(US101・250)、傾斜堆積する中層(US209～)、ほぼ水平な整地面(US240・242)から掘削停止層(US247)までの下層に大別される。動物遺存体は少なく、土器はIV・V群が主体を占める。各壁面では、多くの堆積層が確認されたが、以下、西壁を中心に適宜に選択して記載する。

US101 暗褐色土層。表土・耕作土。草木の根や小礫が多く混じる。IV群土器各類を混出。

US222 黒褐色砂質土層。南壁よりも北壁側に傾斜堆積。IV群土器4・5類が出土。

US223 黒褐色混貝砂質土層。西壁と北壁側に傾斜堆積。魚骨、ウニ殻を含み、IV群土器2・4・9類、V群(擦文土器)などが出土。

US225 混貝砂質土層。西壁から北壁中央まで傾斜堆積する。土器はIV群1～6類、厚手系の9・10類、獣骨が目立つ。

US227 攪乱・埋土。IV群土器2・4・5類とV群土器、近現代遺物が出土。

US230 間砂層。US225の直下に厚く堆積。遺物に乏しいが、IV群土器6類が出土。

US232 混貝砂質土層。西壁よりも南壁側で厚く傾斜堆積する。獣骨・魚骨、ウニ殻、貝類を多く含む。IV群1・2・4・6類、厚手系の9・10類とV群土器が出土。

US234 混貝砂質土層。南西側に扇形をなして傾斜堆積する。獣骨・魚骨、貝殻片を含む。土器の量は少ない。III群、IV群1・4・5類(ソーマン文土器)、9・10類が出土。

US237 極暗褐色砂質土層。層厚1～2cmの純粋な砂層。広い範囲でUS238の直上にほぼ水平に堆積する。無遺物であり、動物遺存体も含まない。

US238 混貝暗褐色土層。西壁中央から北壁に現れ、魚骨を主体にウニ・貝殻を含む。東・南壁側では貝類を含まない土層となる。水平堆積し、土質は硬くしめる。B10区7層に対比される。土器はIII群とIV群1～4類が目立ち、IV群9類を伴う。

US239 混貝砂質土層。北壁沿いに30cm幅で検出された。US240と類似する。

US240 混貝砂層。調査区の北西角より扇形に堆積する。混貝層であるが、場所によって層相が異なる。IV群土器2・4・6類と厚手系のIV群10類を伴出。

US242 極暗赤褐色砂質土層。南壁側に分布し、西壁と東壁の途中まで現れる。骨片を僅かに伴う。IV群土器1・3・4類、厚手系の9類、V群土器が出土。

US245 混貝・ウニ殻・魚骨層層。中層の混貝層よりも安定的に厚く、ごく緩やかに傾斜堆積した混貝層である。他層よりも土器が多く出土している。IV群4類と厚手系の9・10類、V群が目立つ。IV群1・2類も僅かに検出された。

US246 混木質遺物層。ほぼ水平に堆積し、しまり・粘性が強い。B10区由来の木質遺物片を含む。土器はIV群2・4・6・10類が多く、僅かにV群(擦文土器)を伴う。

US247 黒褐色砂質土層。調査区全域にほぼ水平堆積する。若干の炭化物を含む。しまり、粘性やや強。以下は、褐灰色固結ブロックを含む地山層(US248)となる。I群、IV群1・2・4・6・9・10類、V群など幅広い年代の土器を出土。(柳澤)

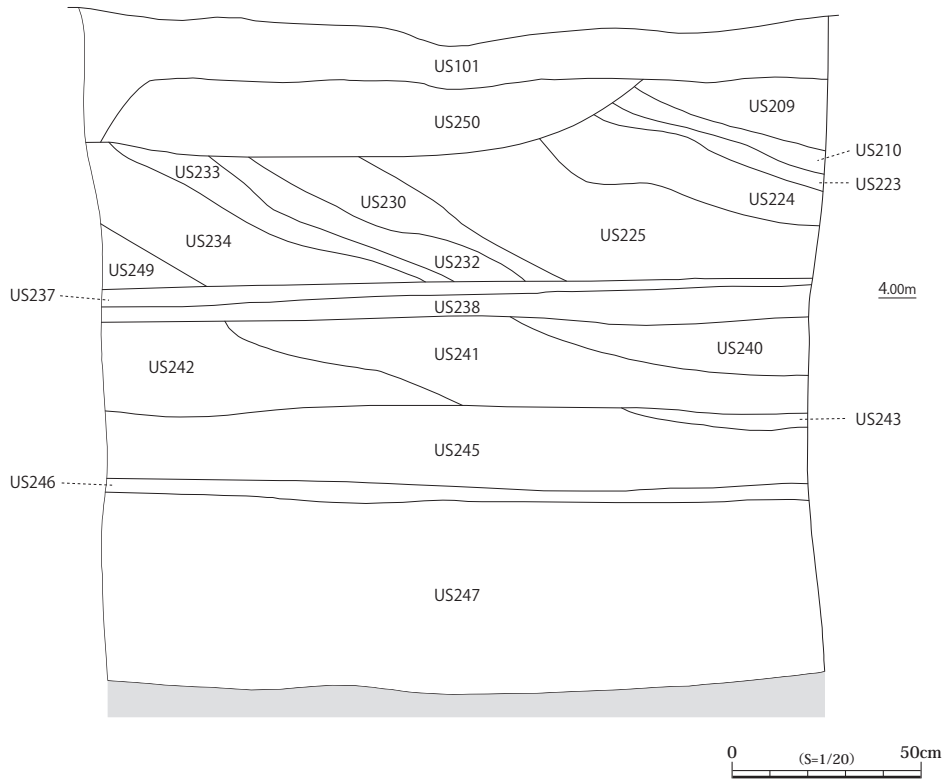


图 17 B9区西壁土层断面图



写真 17 B9区西壁土层断面

II. 各区の調査概要



写真 18 B9 区南壁土層断面

表 4 B9 区土層観察表 (西壁)

層序	土層名 (色調)	土層の特徴
US101	暗褐色土層 (10YR2/2)	表土。耕作地であり、草木の根や石が多く混入する。
US250	黒褐色土層 (10YR2/3)	西壁南側のみに堆積する。US210～234 を攪乱した混合層。
US222	黒褐色砂質土層 (7.5YR3/1)	南壁寄りの北壁側にのみ傾斜堆積する。しまり、粘性弱。
US223	黒褐色混貝砂質土層 (5YR3/1)	西壁・北壁側に傾斜堆積する。魚骨、ウニ殻を中量含む。
US225	混貝砂質土層 (10YR2/3)	西壁・北壁側に傾斜堆積する。黒褐色を呈する。獣骨が目立つ。
US227	攪乱 (US226) 埋土 (7.5YR3/1)	黒褐色砂質土層。しまり、粘性弱。近現代遺物を伴う。
US230	間砂層 (7.5YR3/1)	US225 直下に急傾斜で厚く堆積する。西壁のみに現れる。
US232	混貝砂質土層 (10YR2/1)	西壁から南壁側に傾斜堆積する。暗褐色を呈し、獣骨・魚骨、貝・ウニ殻を含む。
US234	混貝砂質土層 (10YR3/2)	南西側に扇形をなして傾斜堆積する。暗褐色を呈し、しまり、粘性弱。獣骨・魚骨、貝片を含むが、土器は乏しい。
US237	極暗褐色砂質土層 (7.5YR2/3)	1～2cm の層厚で水平に堆積する無遺物の砂層。しまり弱、粘性弱。
US238	混貝暗褐色土層 (10YR3/3)	US237 の下にほぼ水平堆積する。西壁中央から北壁では明瞭に現れ、魚骨、ウニ殻、貝類を含む。東・南壁側ではほぼ単純な土層となる。粘性を帯び、しまり強。
US239	混貝砂質土層 (10YR2/2)	北壁沿いに幅 3cm で堆積する。魚骨、ウニ殻、貝類が混じる。しまり・粘性弱。
US240	混貝砂層 (10YR2/2)	北西角より扇形に堆積する。貝殻、魚骨の保存状態が不揃いで、場所によって層相に違いが認められる。北西方向に軽く傾斜。黒褐色を呈する。
US242	極暗赤褐色砂質土層 (5YR2/3)	南半部に分布する。やや粘土質でしまり強。骨の細片を伴う。
US245	混貝・ウニ殻・魚骨層 (7.5YR3/1)	中層と比べ水平に近い堆積層。南側と北側ではごく緩やかに傾斜する。上位の混貝層よりも厚く、全ての壁面で安定的に現れる。黒褐色を呈し、魚骨、ウニ殻を含む。下部ではより多くの貝片が混じる。
US246	混木質遺物土層 (10YR2/1)	層厚 5cm 前後で、全域にほぼ水平堆積する。B10 区に由来する木質遺物を斑状に含む。動物遺存体は未検出。
US247	黒褐色砂質土層 (7.5YR3/1)	全域にほぼ水平堆積する。若干の炭化物が混じる。しまり強、粘性やや強。

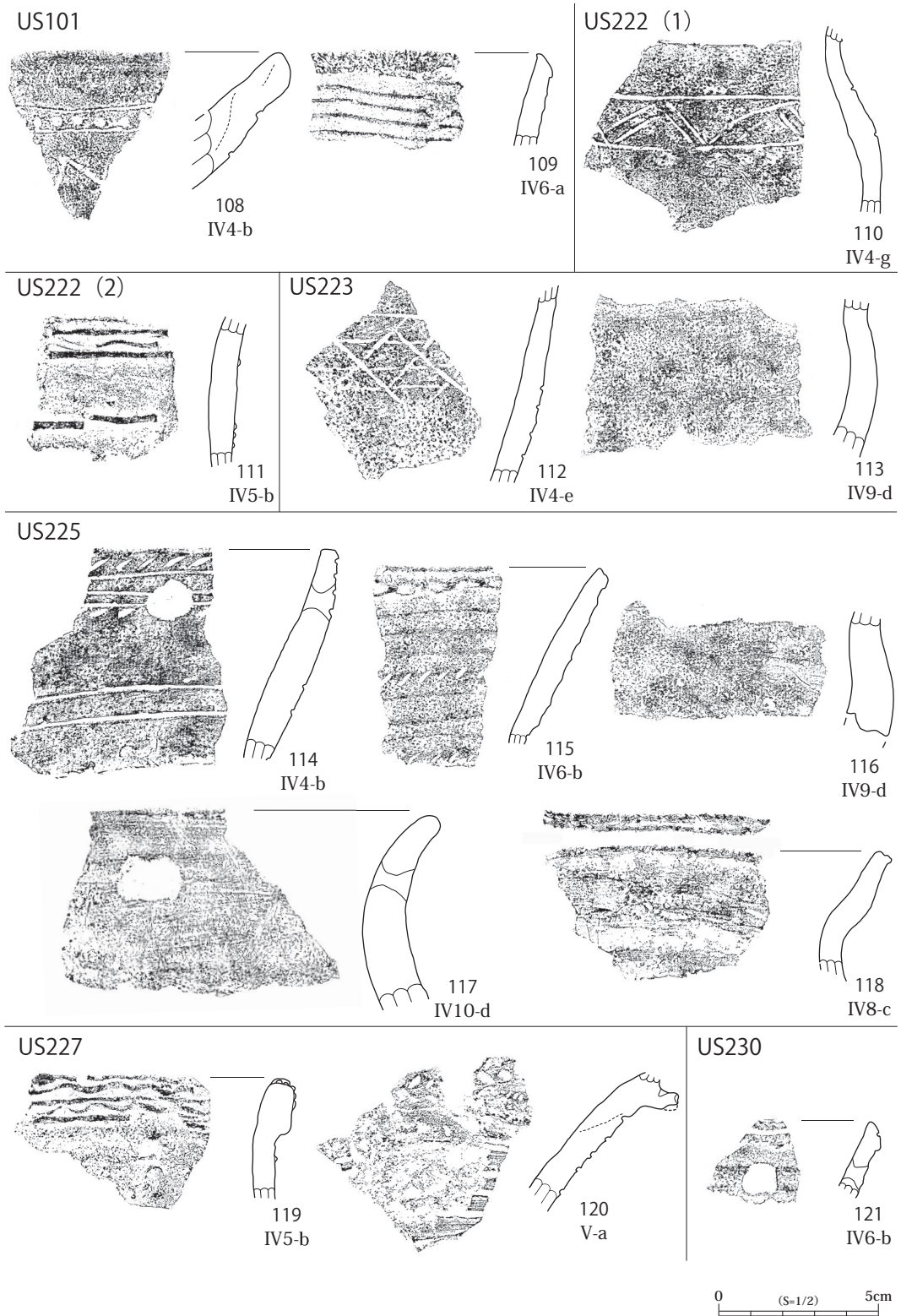
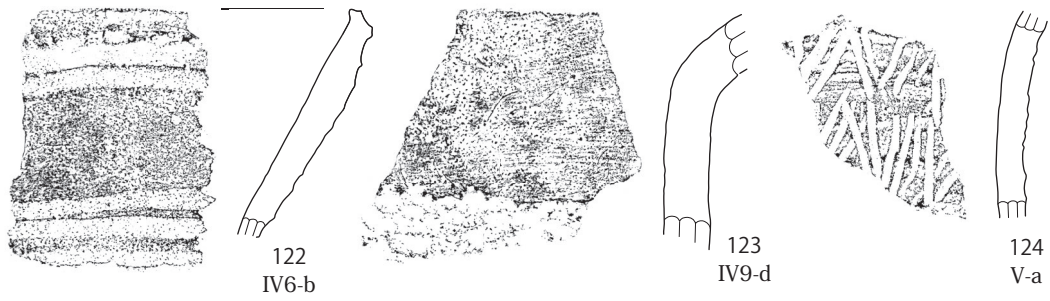


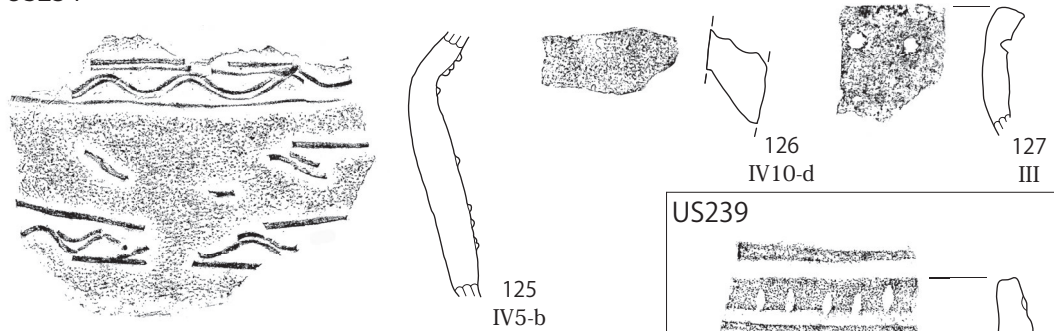
图 18 B9区出土土器 (1)

II. 各区の調査概要

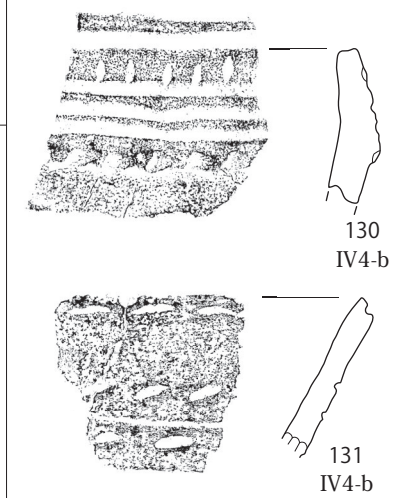
US232



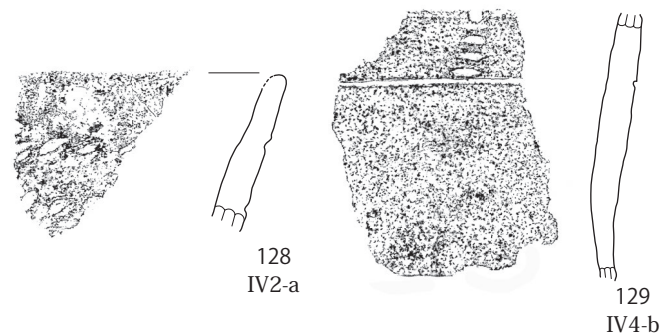
US234



US239



US238



US240

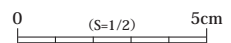
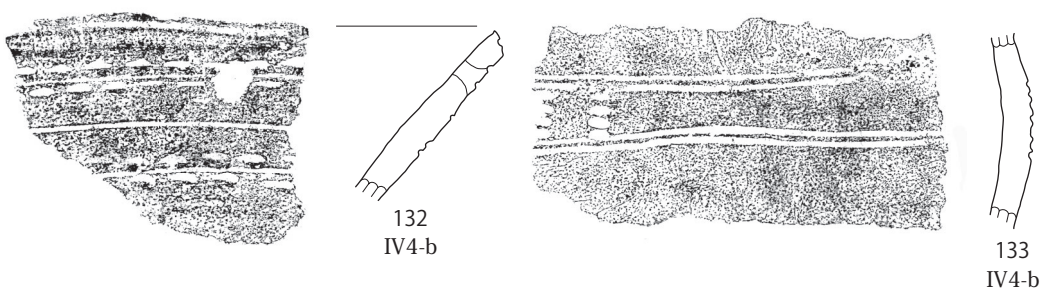


図 19 B9 区出土土器 (2)

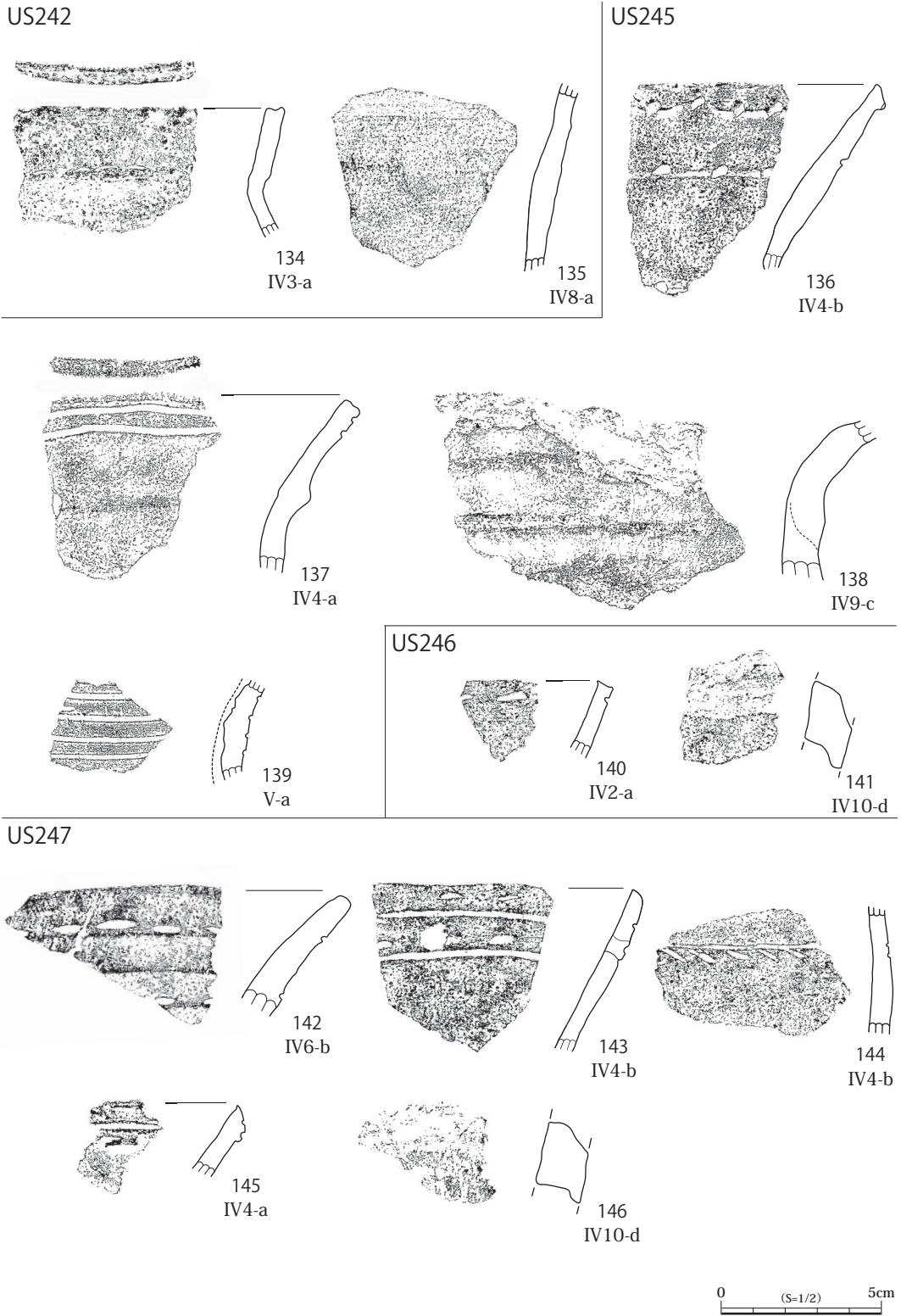


图 20 B9区出土土器(3)

5. B8区 (A・B地点)

(1) 概要 (図3)

B8区は、B7区(第2次調査)の北側に隣接する。第3次調査で、B7区に繋がる文化層の堆積状況を把握するため、B9区と対応する位置に2.0×2.0mの調査区を設定した。これはA・B地点で最も南側にあたる。土層は、耕作と攪乱によって形成された上層(US101)、獣骨・魚骨、ウニ殻、貝類が傾斜堆積する中層(US207～235)、ほぼ水平堆積する下層(US236)に大別される。B8区は、深さ約1.5mまで掘削し、地山と考えられる面を検出したところで調査を終了した。遺物は、土器・石器・骨角器、近現代遺物のほかに、自然遺物として獣骨・魚骨、貝類などが検出されている。土器は全体としてIV群が主体となるが、多くの層でI～III群およびV群土器の出土もある。

(2) 層序と出土遺物 (図21～24, 表5, 写真19・20)

- US101 (1層) 全域に堆積する。耕作地として利用されており、草木の根や小石が含まれる。IV群土器、近現代遺物、獣骨が出土している。
- US207 (2層) 全域に堆積し、魚骨がブロック状に混じる黒色土層である。遺物は土器・石器・骨角器、近現代遺物が出土している。土器の種類は多様で、10類を含むIV群の各類別が主体を占め、V群土器の出土もある。
- US215 (3層) 調査区の南西側に傾斜堆積している。魚骨、ウニ殻、貝類を多く含む黒色土層である。遺物は土器・石器、獣骨が出土している。土器はIV群1・2・6・8類を主体として、II群とV群が検出されている。
- US213 東壁側で検出された溝状の攪乱部分に相当する。US216・217・231を切り込んでいる。B7区やB9区でも同様のものが確認されており、これらは相互に繋がりと推定される。地表からの深さは40～50cmほどで、調査区外へ続いている。
- US214 攪乱(US213)部分の埋土で暗灰黄色を呈する。魚骨がブロック状に混じる。若干の獣骨、貝類が検出され、土器はIV群4類が出土している。
- US216 (4層) 東側を除く全域に堆積。にぶい黄褐色土層で南へ緩やかに傾斜する。土器の出土は少ないが、II～IV群の多様な破片が検出された。
- US217 (5層) ウニ殻・魚骨・貝類を主体とする黒色土層。北東方向に傾斜堆積している。土器は出土量が多く、IV群各類を主体としながら、II・III・V群も検出されている。また近現代遺物のほか、石器、獣骨、貝類も出土している。
- US231 (6層) 区域内の全面に堆積する黒色土層である。土器はIV群4・8・10類とV群が出土している。また、B10区に由来すると推定される木片のほかに石器、獣骨も少量検出された。
- US235 (7層) ウニ殻・魚骨・貝類を含む黒褐色土層。南半部に堆積し、近現代遺物を僅かに伴う。土器はIV群6・8・10類を主体とし、V群の伴出が確認された。
- US236 (8層) 全域に堆積する黒褐色土層。遺物は土器、剥片、獣骨が検出された。図版を省略しているが、北東隅と南壁際で縄文土器(中期)がまとめて出土した。それ以外では、II群とIV群土器2・4・5・8類などが出土している。

US244 (9層) 明褐色砂質土層で地山に相当する無遺物層である。黄色から灰褐色の固結ブロックを含む。北東から南西に緩く傾斜しており、B7区のUS185に対比される。

(廣田 哲徳)

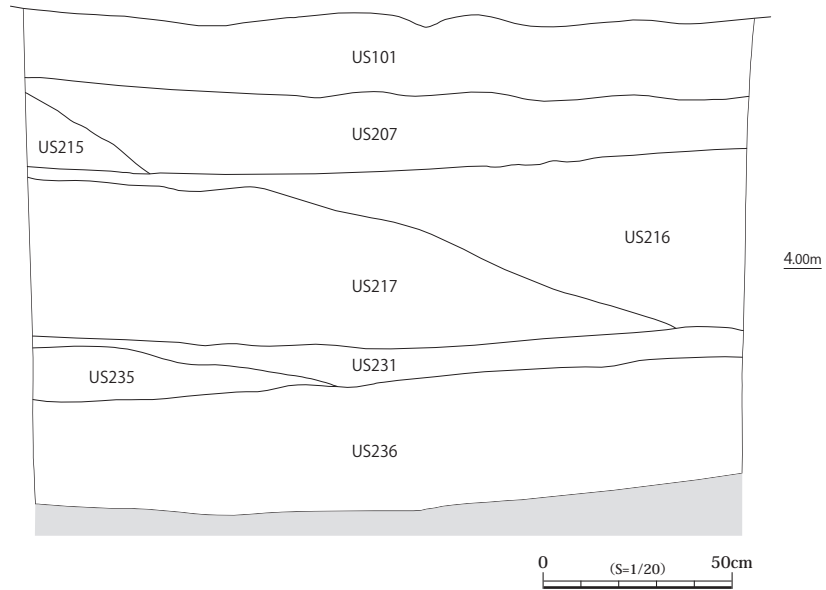


図 21 B8区西壁土層断面図



写真 19 B8区西壁土層断面

II. 各区の調査概要

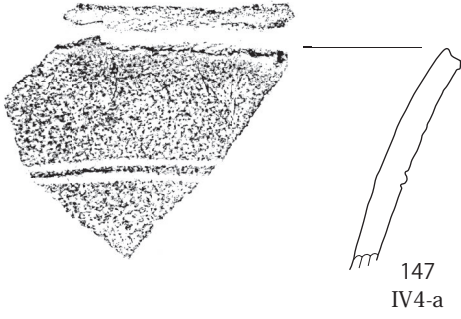


写真 20 B8 区南壁土層断面

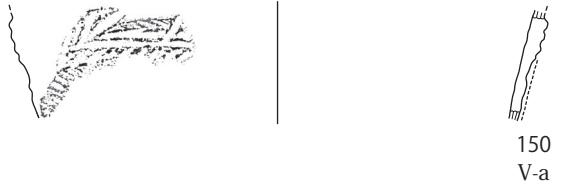
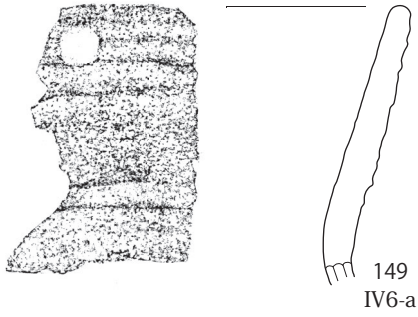
表 5 B8 区土層観察表

層序	土層名(色調)	土層の特徴
US101 (1層)	黒褐色土層 (2.5YR3/2)	元々は耕作地として利用されており、草木の根や石が混入する。
US207 (2層)	黒色土層 (7.5YR2/1)	調査区の全域に堆積する。魚骨がブロック状に散在するほか、土器、礫などを含む。
US215 (3層)	魚骨・ウニ殻・貝混土層 (10YR2/1)	南壁に沿って調査区の南西角から北方向に向かって傾斜堆積する。魚骨、ウニ殻、貝殻を多量に含む。南壁から約 30cm の幅で収束する。
US213	溝状遺構	東壁際に沿って検出され、南北方向に細長く伸びている。これは第 2 次調査において B7 区 (US148) と B9 区 (US211) で検出された幅の狭い溝状遺構と連続するものと推定される。木質遺物を伴う US231 よりも上層にあたるので、近世以降に敷設された排水設備である可能性が想定される。
US214	暗灰黄色質土層 (2.5YR4/2)	US213 の埋土である。土質は US207 に近似しており、やや明るい色調を呈する。
US216 (4層)	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)	調査区の全域に堆積する。北から南に向かって緩やかに傾斜する。しまりが強い。
US217 (5層)	魚骨・ウニ殻・貝層 (10YR2/1)	魚骨、ウニ殻、貝類を主体とする。調査区の南半部に厚く堆積し、北壁には到達しない。様々な土器を豊富に包含しており、乱れた堆積状態が看取される。
US231 (6層)	黒色砂層 (10YR2/1)	調査区の全域に堆積する。ややしまりあり。獣骨のほか、V 群 (擦文土器) の破片がやや目立って出土し、IV 群 9 類の厚手系土器を僅かに伴う。US231 では、B9 区に由来するものと推定される木質遺物が数多く検出された。
US235 (7層)	ウニ殻・魚骨・貝混土層 (10YR3/2)	調査区の南半部にのみ堆積する。魚骨、ウニ殻、貝類などを含むが、場所によって層相に違いが認められる。上面でまとまって土器片を検出している。
US236 (8層)	黒褐色土層 (10YR2/2)	調査区の全域に堆積し、北東角から南西角へ向かって緩やかに傾斜する。しまり、粘性が強い。

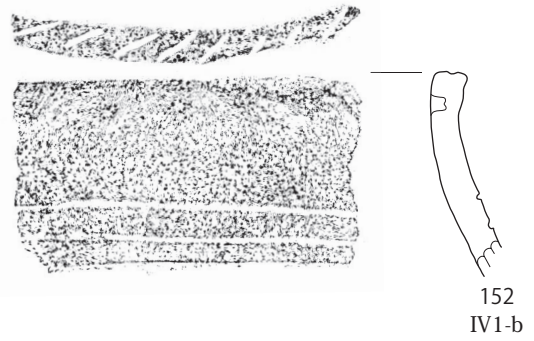
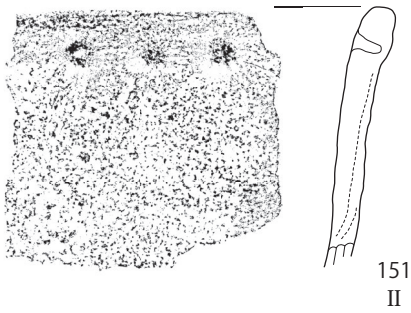
US101



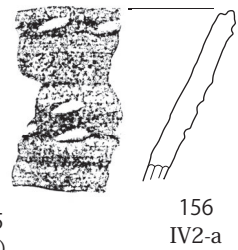
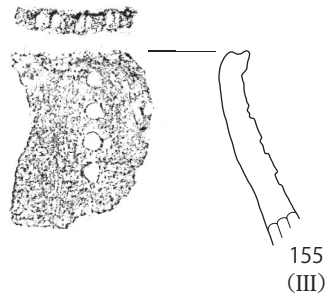
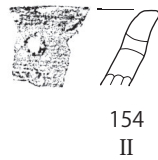
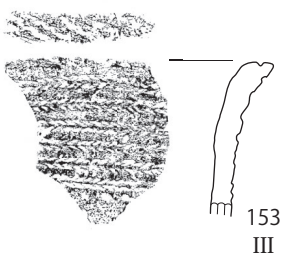
US207



US214



US216

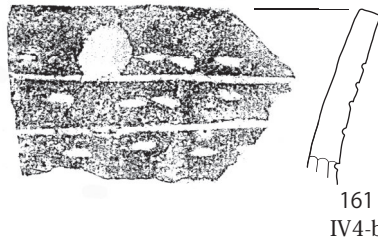
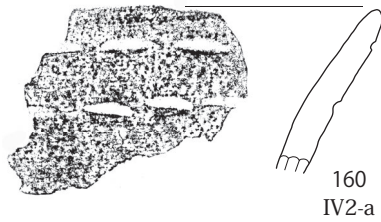
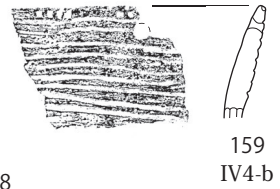
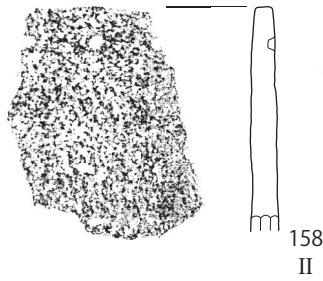
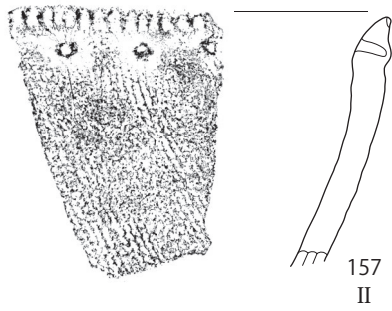


0 (S=1/2) 5cm

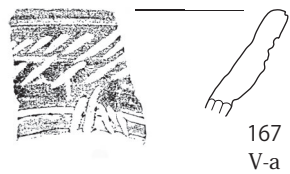
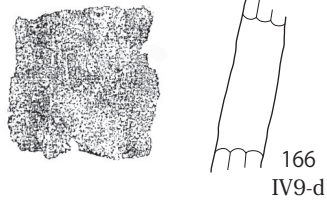
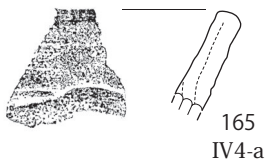
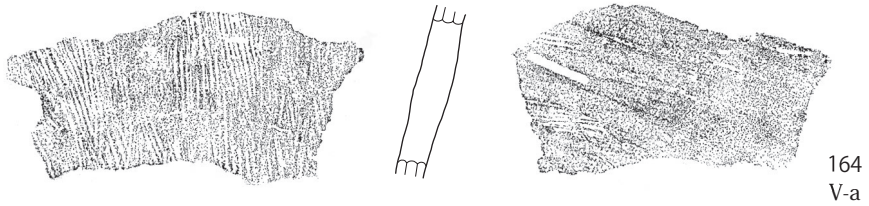
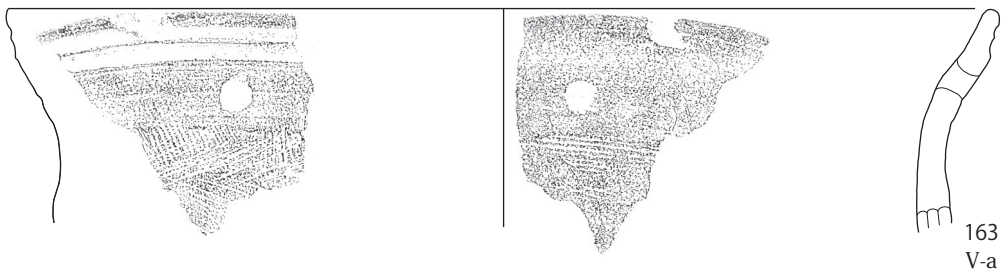
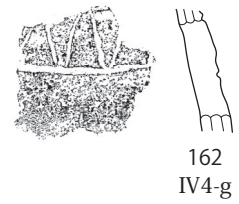
图 22 B8区出土土器 (1)

II. 各区の調査概要

US217



US231



0 (S=1/2) 5cm

図 23 B8 区出土土器 (2)

US235



US236

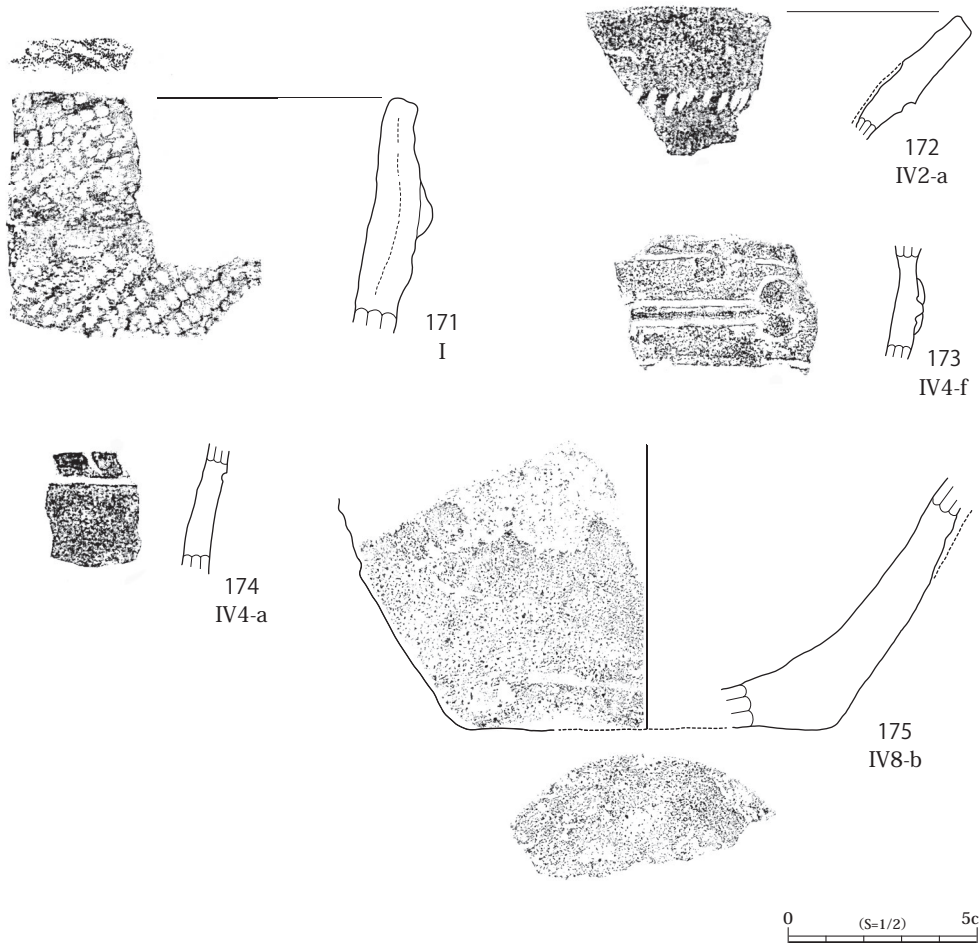


图 24 B8区出土土器 (3)

6. C3区 (C地点)

(1) 概要 (図3)

C地点は第1次調査のC区(「C1区」に改称)を起点とし、海(旧砂丘)側に向かう緩斜面に位置している。大部分は雑草に覆われており、北端部のみ畑地として利用されている。C3区は、筑波大学の試掘地点P2・3の中間に位置する。第3次調査で1.0×1.5mのトレンチを設定し、深さ85cmまで掘削したが、日程上の制約があるために調査を停止した。

(2) 層序と出土遺物 (図25・26, 表6, 写真21~23)

- US320 表土。草木の根を多く含む暗褐色土層である。近現代遺物、IV群土器片が若干出土する。
- US321 暗褐色砂層。土粒を含み、炭化物や焼土粒を伴う。近現代遺物は僅かで、IV群土器の良好な破片を検出している。図26-178例では、擦文土器系統の文様モチーフと摩擦式浮文・貼付文が併用される。
- US324 オリーブ黒色砂層。炭化物を含み、小砂利や貝殻片の集積と黄褐色土ブロックが認められる。これらは二次的な堆積状況を示すものであろう。土器はIV群5・6類などが出土している。
- US325 オリーブ黒色砂層。US324よりも炭化物が増加する。遺物に乏しいが、厚手の元地式土器片を検出している。
- US326 黒色砂層。上層よりさらに炭化物が増加し、大きなものも含む。土器はIV群4類に擦文土器を伴う。(柳澤)

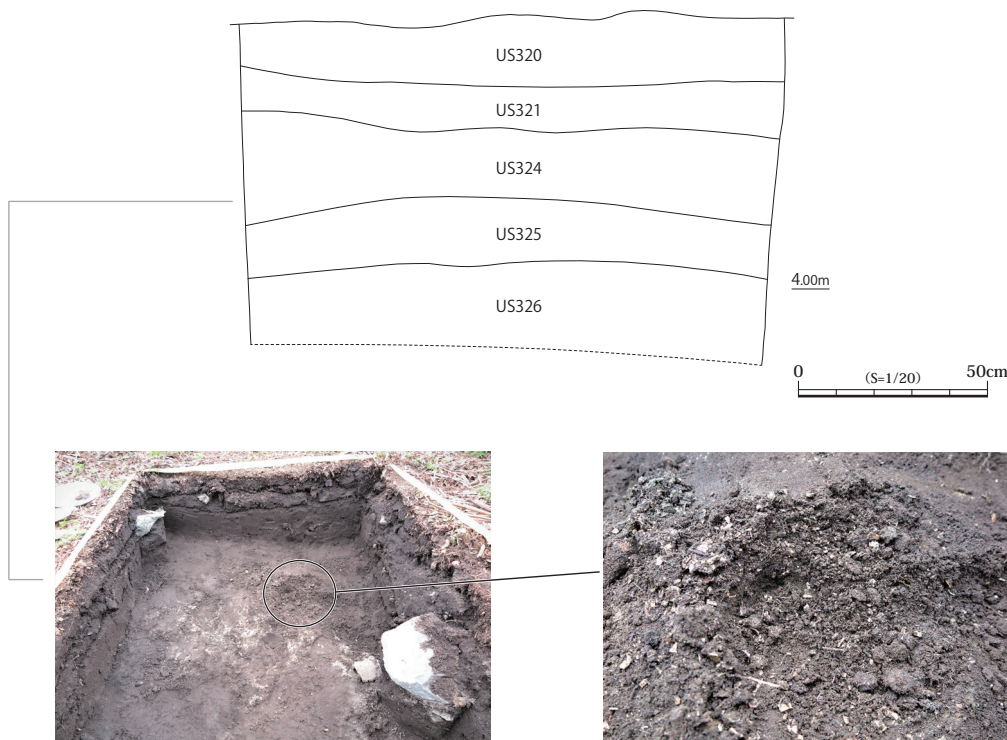


図25 C3区東壁土層断面図



写真 21 C3区西壁土層断面



写真 22 C3区南壁土層断面

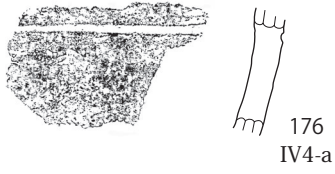


写真 23 大型土器片の出土状況 (2層)

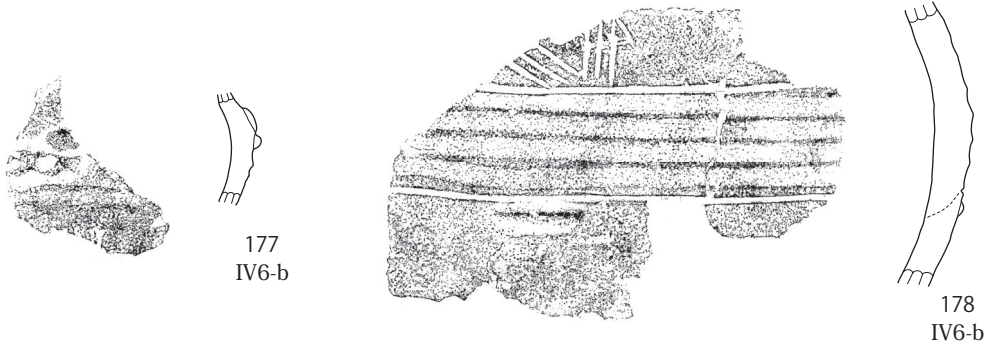
表 6 C3区土層観察表

層序	土層名 (色調)	土層の特徴
US320 (1層)	暗褐色土層 (2.5YR2/3)	しまり、粘性弱。草木の根などを多く含む。近現代遺物を伴う。
US321 (2層)	暗褐色砂層 (10YR2/2)	明褐色の土粒を含み、炭化物を少量伴う。しまり、粘性弱。近現代遺物を僅かに伴う。
US324 (3層)	オリーブ黒色砂層 (5Y2/2)	炭化物をごく少量含む。小さな砂利と貝殻が部分的に集積する。また、直径1～5cm大の黄褐色土ブロックが混じる。
US325 (4層)	オリーブ黒色砂層 (5Y2/2)	炭化物の量が増加する。部分的に黒色砂の集中する箇所が認められる。厚手のIV群10類土器片を検出。
US326 (5層)	黒色砂層 (10YR2/2)	さらに炭化物が増加し、直径5cm大のものを含む。擦文土器片を検出。

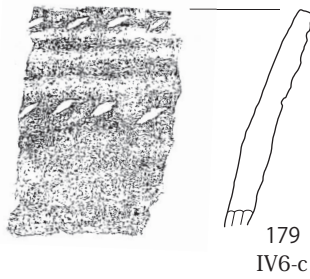
US320



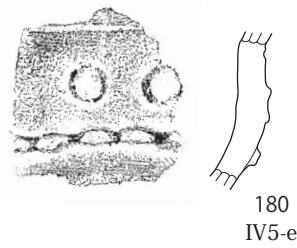
US321



US324



US325



US326

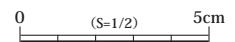
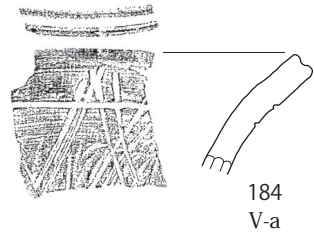
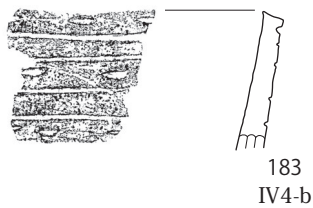
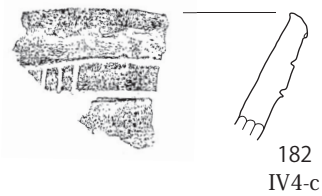


图 26 C3区出土土器

7. C2区 (C地点)

(1) 概要 (図3)

C2区は、C1区に近接する地点の堆積状況を観察するために、第3次調査で1.0×1.5mの調査区を設定した。遺物が出土しない深さ2mまで掘削し、調査を終了した。

(2) 層序と出土遺物 (図27・28, 表7, 写真24・25)

C2区は土層の特徴から上層(US301～)、中層(US312～)、下層(US319～)に大別される。動物遺存体は少なく、土器はIV群が主体を占め、一部でIV群1・2類を若干伴う。

US301 暗褐色土層。草木の根が密生し、若干の近現代遺物と貝類、土器片を伴う。北壁から南壁に向かって緩やかに傾斜する。

US307 黒褐色砂質土層。南壁側に緩やかに傾斜する。湿り気を帯び、海獣骨、貝類、土器片、近現代遺物では瓶などのガラス類、罐などの鉄製品を伴う。

US308 小砂礫層。東壁の途中から南壁側にかけて三角状に堆積する。北・西壁では検出されない。無遺物層である。

US309 暗褐色砂層。有機質土壌、小砂利・礫を含み、若干の近現代遺物を伴う。

US310 ピット本体。幅40cm、深さ65cmで楕円形と推定され、US308を切り込む。

US311 ピットの覆土である。小砂利・礫を含み、微小なガラス片と土器片を検出。

US312 しまりの強い暗褐色砂層である。下部まで炭化物を含むが、上部では大きなものが目立つ。大型の魚骨、海獣骨、貝類を伴い、他層よりも土器片の数量が多い。

US313 暗赤褐色砂層。北壁側で厚みを増す。腐食貝と炭化物を含む。IV群4類などが出土。

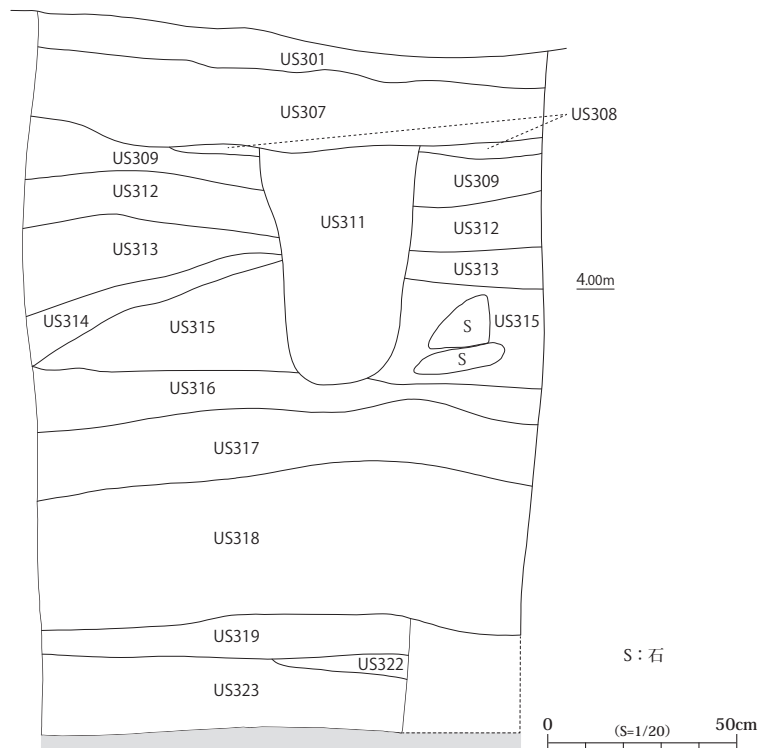


図27 C2区東壁土層断面図

II. 各区の調査概要



写真 24 C2 区北壁土層断面



写真 25 C2 区東壁土層断面

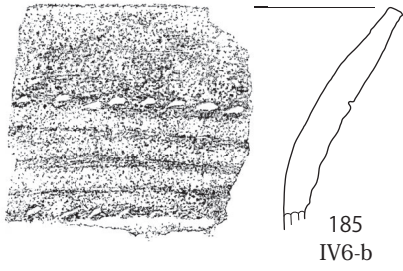
- US314 北壁側へ急傾斜する。炭化物が多く、カラフトブタの骨や腐食貝を含む。ピットの北側ではウニ殻、魚骨が混じり、南側は暗赤褐色の砂層となる。土器はIV群 4・5類が主体を占める。
- US315 黒褐色砂層。中央部から北壁側へ急傾斜で堆積する。南壁から中央部では炭化物が多い。カラフトブタの骨・海獣骨・魚骨、貝類を検出。土器はIV群が主体を占めるが、厚手の擦紋土器1点(図28-189)を伴出。
- US316 灰褐色砂層。上部は純砂層、下部は炭化物と焼土の塊を含む。IV群4類土器が出土。
- US317 黄褐色砂層。湿り気が多く、ダム状の有機質土壌を含み、炭化物が僅かに散る。微量の海獣骨を検出。土器はIV群4・6類などが出土。
- US318 黒褐色砂層。黒色・暗褐色の土塊を多量に含み、炭化物とカラフトブタの骨、魚骨片が僅かに検出された。土器はIV群4・6類などが出土している。
- US319 魚骨混じり暗赤褐色砂層。東壁側では、保存状態の良い魚骨を含み魚骨層の様相を示す。土器はIV群4・6・9・10類などが出土。骨篋1点を検出。
- US322 北壁の南側にのみ堆積する黒褐色土層で、僅かに魚骨片を含む。
- US323 黒褐色砂質土層。ほぼ水平に堆積し、上部で散漫にIV群2・4類を出土する。

(柳澤)

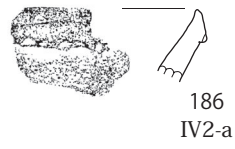
表7 C2区土層観察表

層序	土層名(色調)	土層の特徴
US301 (1層)	暗褐色土層 (7.5YR2/2)	しまり、粘性弱。草木の根を多く含む。近現代遺物を出土。
US307 (2層)	黒褐色砂層 (10YR2/2)	しまり、粘性弱。上部では草木の根が多量に含まれるが、下部では減少する。様々な近現代遺物が出土し、最下部でガラス小片を検出。
US308 (3層)	小砂礫層 (7.5YR2/2)	東壁の途中から南壁側に向かって三角状に堆積する。厚さ1~2cm程度、直径数mm~1cm大の小礫で構成される。北壁に向かって薄層化する。ややしまりあり。粘性弱。遺物の出土はない。
US311 (4層)	ピット覆土 (10YR2/1)	暗褐色砂質土層。砂利・小礫を含む。しまり、粘性弱。ガラス片を検出。
US309 (5層)	暗褐色砂層 (7.5YR2/3)	腐植質を含み砂利・小礫を伴う。ややしまりあり。粘性弱。近現代遺物が出土。
US312 (6層)	暗褐色砂層 (7.5YR2/3)	上部では炭化物が多く含まれ、中・下位では散在的になる。魚骨・海獣骨、アワビ片などを僅かに含む。しまり強、粘性弱。
US313 (7層)	暗赤褐色砂層 (5YR3/2)	僅かな腐食貝、獣骨片、相当量の炭化物を含む。調査区全体に堆積する。北壁側では急傾斜する。ややしまりあり。粘性弱。
US314 (8層)	ウニ殻・魚骨層 (7.5YR2/3)	中央から北壁にかけて急傾斜で堆積する。腐食した貝片を含み、ウニ殻、魚骨をやや多量に含む。カラフトブタの骨・海獣骨、大型の魚骨を検出。しまり、粘性弱。
US315 (9層)	黒褐色砂層 (5YR3/1)	北壁・南壁寄りの箇所では傾斜の方向と角度を異にする。炭化物を伴い、僅かにカラフトブタの骨・海獣骨・魚骨を検出。しまりあり。粘性弱。
US316 (10層)	灰褐色砂層 (7.5YR2/2)	水平に堆積する。下部では炭化物や焼土塊を伴う。遺物に乏しく、動物遺存体も未検出である。しまりは中程度、粘性は弱い。
US317 (11層)	黄褐色砂層 (2.5YR4/4)	中央から南北に向かい緩やかに傾斜する。水分が多く、球状土塊を含む。ややしまりあり、粘性弱。微量の炭化物、若干の遺物を伴う。
US318 (12層)	黒褐色砂層 (10YR2/2)	水分が多く、腐食した魚骨、炭化物と多量の土塊を含む。南北方向に緩やかに傾斜する。カラフトブタの骨・魚骨を少量検出。しまりあり。粘性弱。
US319 (13層)	魚骨混じり暗赤褐色砂層 (2.5YR4/3)	東壁側では部分的に、保存状態の良い魚骨が多量に濃集し、魚骨層の様相を示す。しまりは中程度から弱く、粘性も弱い。
US322 (14層)	黒褐色土層 (10YR2/3)	北壁の南壁寄りでのみ検出された。僅かに魚骨を伴う。ややしまり、粘性あり。遺物の出土はない。
US323 (15層)	黒褐色砂質土層 (10YR3/1)	全域に堆積する。しまり強、粘性弱。遺物は上部で若干出土。下部では出土しない。

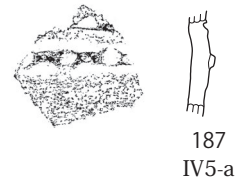
US307



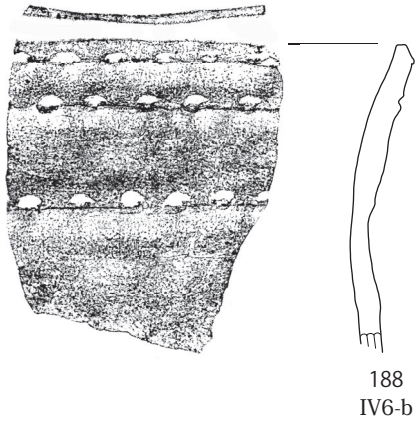
US309



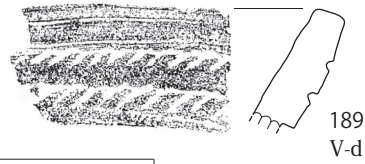
US314



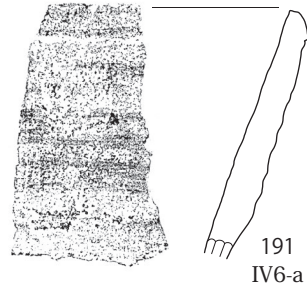
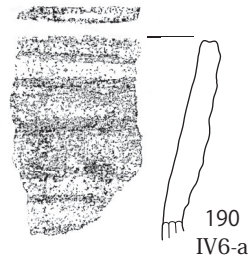
US314



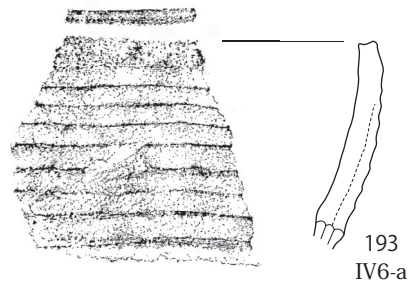
US315



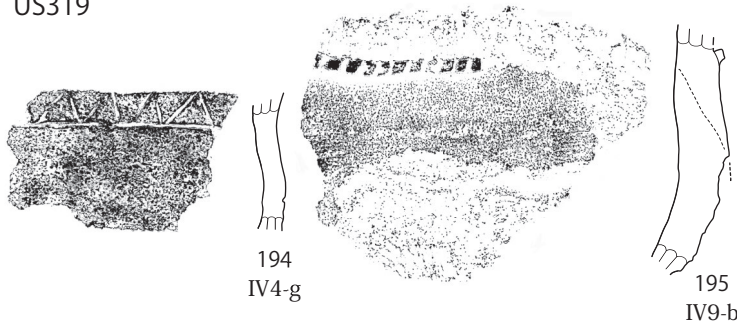
US317



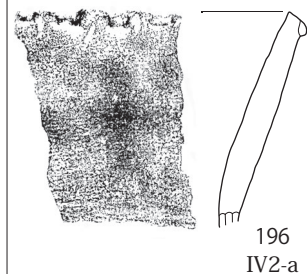
US318



US319



US323



0 (S=1/2) 5cm

图 28 C2区出土土器

8. F1区 (F地点)

(1) 概要 (図4)

F地点は、沼浦海岸の北西100m、オタトマリ沼から南に300mほどに位置し、道道108号線に面する(図2)。周辺は水はけが悪く湿潤で、ところどころに湛水が認められる。現状では草地・休耕地となっているが、かつては遺物が表採されたという。平成3年(1991年)には、周辺を含めて北海道教育委員会による調査が実施された。F地点は、この際に試掘されたNo.9・10地点に隣接するものと推定される。No.9・10地点からは、厚手の元地式土器や薄手のオホーツク式土器が若干出土している(岩城ほか編2017:140)。こうした遺物の包含状況や組成を確認するために、第4次調査でF1・2区を設定した。

F1区は、試掘調査No.9地点西側の道路際に面している。1.0×1.5mの大きさでトレンチを設定し、深さ50cmまで掘削した。壁面や掘削面からの湧水が多いため、一部を掘り下げて下部層の上面を確認した時点で掘削作業を停止することとした。狭い範囲ながら近現代の遺物が豊富に発見された。試掘調査No.9・10地点の資料に対比される遺物は未検出である。

(2) 層序と出土遺物 (図29, 表8, 写真26・27)

- 1層 表土。若干の角礫を含む黒褐色土層である。草木の根が多くはびこる。下部では近現代の遺物(ガラス・瓶・プラスチックチューブ・棒状の金属片など)を散漫に出土する。
- 2層 黒褐色土層。草木の太い根が横走する。土層中には炭化物と焼土粒が僅かに認められ、塊状・団粒状の土を伴う。しまり・粘性は強い。大小の近現代遺物を多量に出土する。とくに絵柄のある陶磁器が目立ち、瓶やガラスの破片なども含まれる。
- 3層 黒褐色砂層。粒子の均一な砂層で水分を多量に含む。2層と同じように、この層でも一部で陶磁器やガラス製品などが出土した。
- 4層 黄褐色砂礫層。北東方向に緩やかに傾斜堆積する。砂礫・砂利を多量に含み、3～5cm大の角礫も認められる。遺物はまったく含まれない。色調と組成は、B地点のA4区とB10区で検出された竪穴住居跡の貼床面によく似ている点が注目される。なお黄褐色砂礫層は、近接するF2区では検出されていない。
- 5層 暗灰黄色砂層。北東方向に緩く傾斜堆積する。多量の水分を含み、水の湧出がある。4層と同様に無遺物層である。掘削停止面から15cmほど下の6層(仮称)最上面で、横倒しのアシ・ヨシを確認した。これらは未分解に近い状態であった。(柳澤)

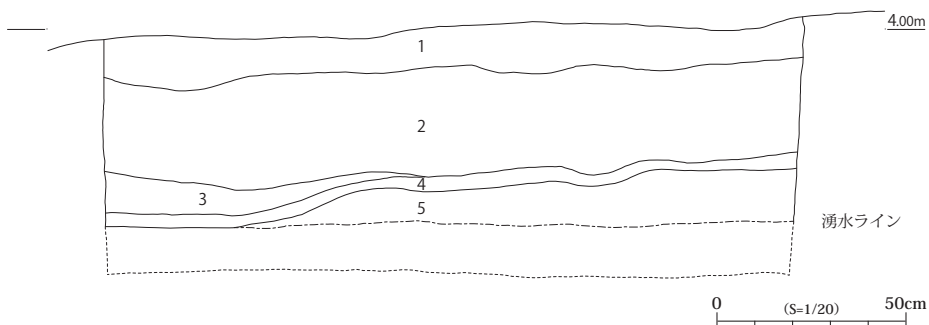


図29 F1区東壁土層断面図



写真 26 F1区東壁土層断面

表 8 F1区土層観察表

層序	土層名(色調)	土層の特徴
1層	黒褐色土層 (10YR3/1)	草木の根を多く含む。上位では若干の角礫が混じる。ガラス、金属片などが出土。下位では少量の近現代遺物を含む。しまりは中程度で、粘性は弱い。
2層	黒褐色土層 (10YR3/1)	太い草木の根が横走る。若干の炭化物を伴い、粒状の土塊を多量に含む。陶磁器、瓶、ガラス片など多数の近現代遺物を検出。
3層	黒褐色砂層 (10YR2/2)	中央から南へ向かって緩やかに傾斜堆積する。草木の根は認められなくなる。層中に水分を多く含み、しまりがある。粘性は弱い。僅かに陶磁器片が出土している。
4層	黄褐色砂礫層 (10YR7/8)	北東方向に緩やかに傾斜堆積する。しまりは中程度、粘性は弱い。小礫を多数含む。また、3～5cm大の角礫も認められる。遺物の出土はない。
5層	暗灰黄色砂層 (2.5Y4/2)	多量の水分を含み、北東方向に向かって緩やかに傾斜する。遺物の出土はない。湧水が多く掘削を停止する。なお、掘削停止線よりも下位で、横倒しの状態になっているアシ・ヨシの群落を面的に確認している。これを仮に6層とする。

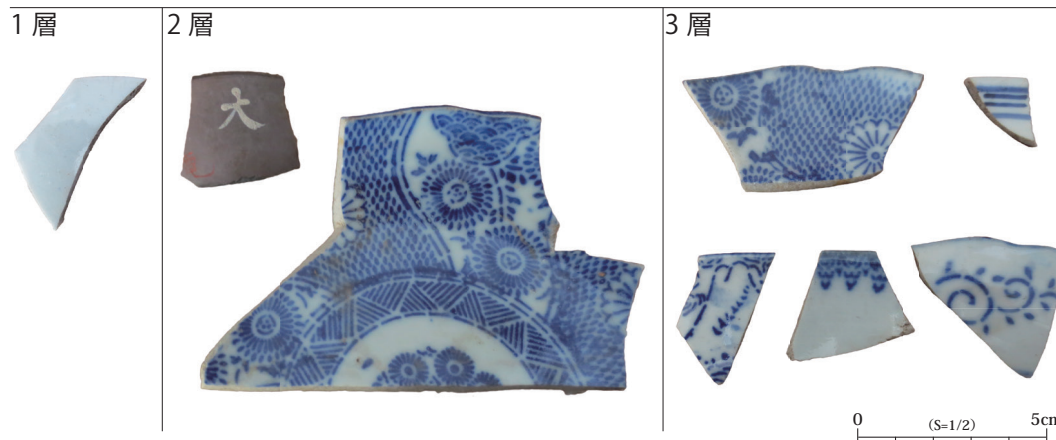


写真 27 F1区出土の近現代遺物

9. F2区 (F地点)

(1) 概要 (図4)

F2区は、試掘調査 No.10 地点の南側、現在の道道 108 号線に平行する位置に 1.0 × 1.5m の大きさで調査区を設定した。F1 区からは北東方向に約 13.2m、周辺はオタマトリ沼から続く低湿地 (沼浦湿原) となっている。F2 区の上層からは、近現代遺物が多く検出されている。下層にはオホーツク文化期を主体とした遺物包含層があり、続縄文文化期の遺物も若干認められる。この遺物包含層より下に、調査区の半分以上を覆うかたちで大型植物遺体が検出されている。植物遺体の多く含まれる下層からは、短時間で数 10cm を超えるほどの水が湧出したため、地表から約 70cm の深さで掘削を停止した。

(2) 層序と出土遺物 (図 30・31, 表 9, 写真 28～31)

- 1 層 表土。チシマザサをはじめとして、草木の根を多く含む黒褐色土層である。
- 2 層 黒褐色砂層。草木の根を非常に多く含む暗褐色砂層である。1・2 層では陶磁器やガラス製品、その破片などの近現代遺物が多量に出土している。
- 3 層 オリーブ色土層。草木の根は次第に少なくなる。上面には炭化物が散る。調査区の南際、地表から約 11cm の深さで大きさ 40cm ほどの石と大型の陶磁器片などが重なって検出されている。3 層下位は、さらさらとした海成の砂質となる。調査区の南西際は、地表から約 35cm の深さにやや大きな石があり、その周辺から厚手の大型土器片 (図 31-199) などの遺物が出土している。このうち口頸部の破片 (200) は、口縁を上にして立った状態であった。また、これらの遺物から約 90cm 離れた調査区の中央付近からは、続縄文土器片 (198)、「卜」状文 (鳥の趾状の文様) の施された土器片 (201)、内黒の土器片 (202) などが出土している。いずれも地表から約 35cm の深さで検出されている。
- 4 層 暗灰黄色砂層。3 層の下位からは砂に汚れが目立つようになり、シラカンバなどの落葉樹や広葉樹などの腐植した大型植物遺体が多く含まれるようになる。とくに北側では調査区の半分以上を覆うように横倒しになった樹木状の木質遺物が検出されている。このほかに泥炭状の植物遺存体も確認されている。これら植物遺体の検出に前後して掘削面からの水の湧出が増えた。4 層では搔器などの石器、土器が若干出土している。ただし、土器は摩滅した小破片が多い。(長山)

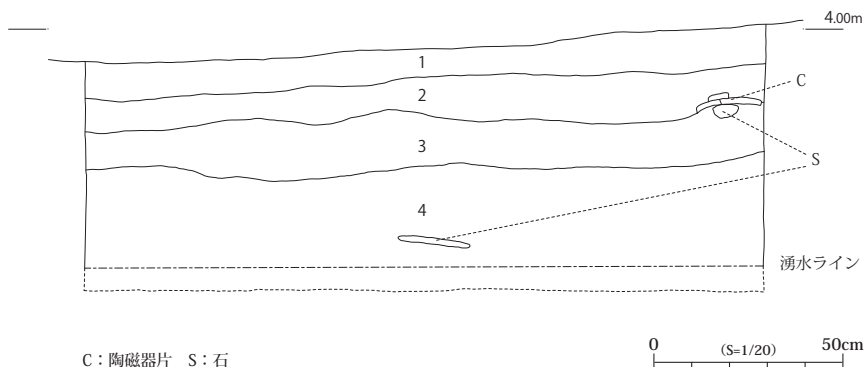


図 30 F2 区東壁土層断面図

II. 各区の調査概要



写真 28 F2 区東壁土層断面

表 9 F2 区土層観察表

層序	土層名 (色調)	土層の特徴
1 層	黒褐色土層 (10YR3/1)	表土。草木の根を多く含む。しまり弱、粘性ややあり。ガラス、金属片、陶磁器などの近現代遺物が多く出土。
2 層	灰黄褐色土層 (10YR4/2)	草木の根を多く含む。しまり、粘性あり。ガラス、金属片、陶磁器など近現代遺物が多く出土。
3 層	オリーブ色土層 (5Y5/4)	草木の根を若干含む。しまりあり。粘性強。直径 5 mm 大の小礫を含む。部分的に塊状となる箇所あり。下位で、大きな石の近くに大型の土器片を検出。
4 層	暗灰黄色砂層 (2.5Y4/2)	草木の根は目立たなくなる。上部に炭化物が散在する。下部では、砂を巻き上げるほど水の湧出がある。また、腐食した木質遺物を含み、砂質の汚れが目立つようになる。調査区の北側を中心として大型の植物遺体を検出。



写真 29 F2 区出土の近現代遺物 (1・2 層)

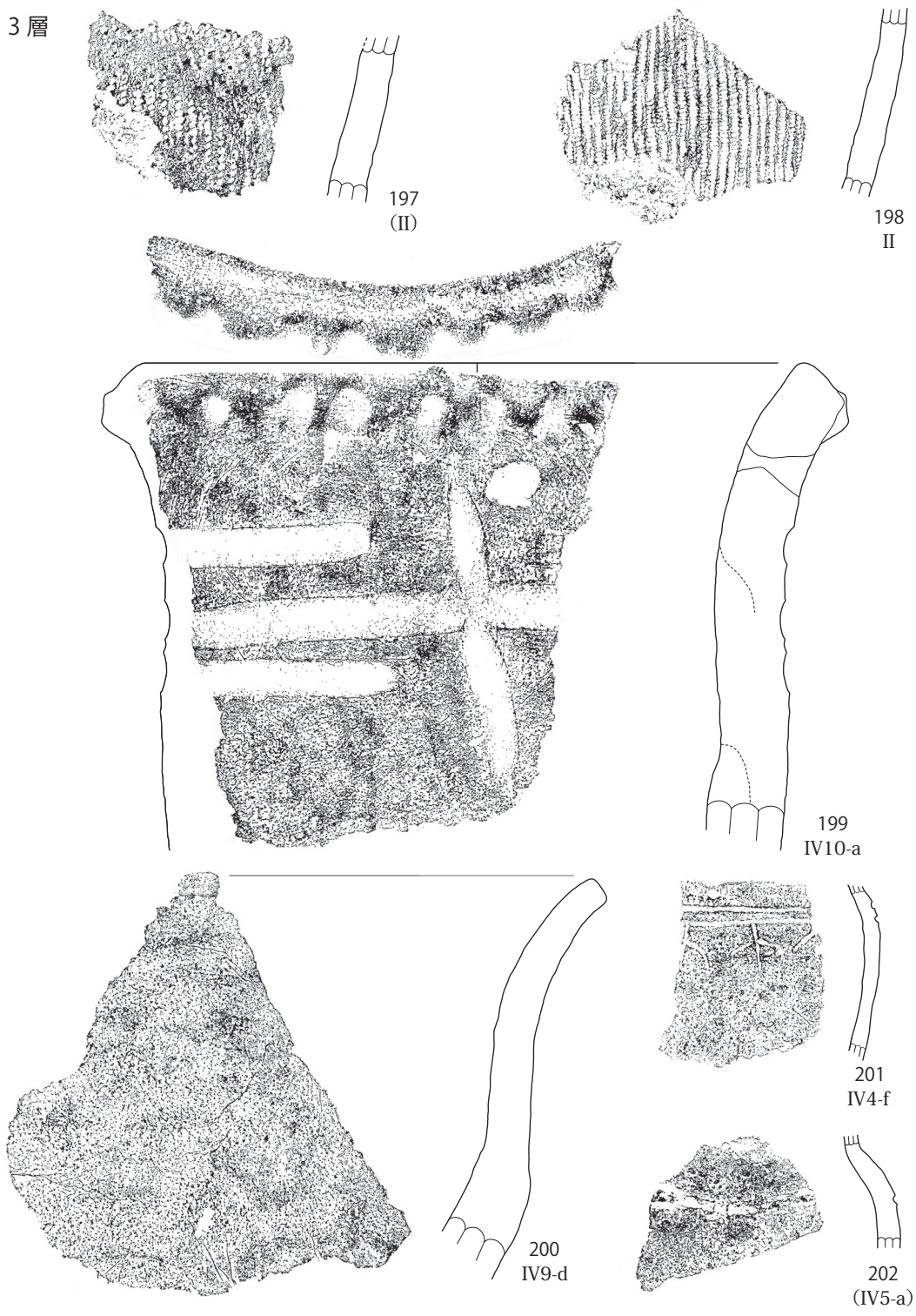


写真 30 大型土器片の出土状況 (3層下部)



写真 31 木質遺物の検出状況 (4層)

3層



0 (S=1/2) 5cm

图 31 F2区出土土器

まとめ

第3・4次調査では、規模はそれぞれに小さいながらもA・B・C・F地点で9か所の掘削を実施した。その結果、これまでの発掘調査における層位的な成果を追認するとともに、新たな事実と未知の土器群の存在を捉えることができた。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行などのために整理作業には思わぬ支障をきたすことになったが、概要報告に掲載した資料を中心として、その成果についてまとめたい。

A3区(第3次調査)

A4区の北側に位置する。上層では近現代遺物が出土する。中層では、砂層と魚骨層が互層堆積している。これらは後世の二次的な堆積と推定され、主として近世以降の漁場造成などに伴うものと考えられる。出土遺物について概観すると、オホーツク文化期の刻文・沈線文土器を主体として、鈴谷式を含む続縄文文化期の土器が散見される。なお今後の分析にもよるが、木質遺物層で出土した用途不明の金属製品や陶磁器片については、その材質や年代に着目し取扱いについて判断したい。

A4区(第4次調査)

A3区の南側に位置する。上層と中層で近現代遺物が認められる。木質遺物層からは鉄製の釘が出土している。これはその形状から和釘(船釘)と判断される。近世以降の漁場造成に関わるものか即断はできないものの、調査区周辺ではかなり規模の大きな開発が行われたものと考えられる。出土遺物を概観すると、刻文・沈線文土器を主体に、擦文土器や厚手の元地式土器が散見される。最下層で検出された竪穴住居跡については、十和田式期に比定できるであろう。これはこの時期の低地部における竪穴住居の存在を裏付けるものであり、礼文島の香深井5遺跡(種市ほか1997)などとの関係が考えられる。

B8区(第3次調査)

B7区(第2次調査)の北側に位置する。上層と中層において近現代遺物が認められる。中層までは、B9・10区と同様の二次的な傾斜堆積物から構成される。種々の土器片が混在し、B9・10区に由来する木質遺物の断片を含む。土器では、刻文・沈線文土器が主体を占め、擦文土器を僅かに伴うが、厚手の元地式土器は稀である。下層では、刻文・沈線文土器に厚手の元地式土器と「擦紋Ⅲ」(佐藤1972)、すなわち「擦文中期」の土器片が伴う。地山付近では刻文土器、また縄文土器も多く発見された。

B9区(第3次調査)

B7区の南側に位置する。上層では近現代遺物が認められる。以下、B10区(第4次調査)の硬化面に対応するUS238までは、互層の傾斜堆積を示す中層に対応する。擦文土器と元地式土器を含むⅣ群の各類が、さまざまな比率で混在的に出土し、A3区の木質遺物層上で出土した陶磁器と近似した破片が検出された。木質遺物層(US246)より下層では、刻文・沈線文土器が安定的に主体を占める。下層ではB8区と同様に擦文土器と元地式土器を僅かに伴う。

B10区(第4次調査)

B9区の南側に位置する。上層から中層にかけて砂層と獣骨・魚骨、貝殻などを多量に含む土層が堆積する。これらはA3区やB9区などと同様に後世の二次的な堆積によるものと推定される。9層では、大型の木質遺物が面的に検出され、それに接して寛永通宝(新寛永)、和釘、細い釘、金属などの金属製品が出土している。10層の下位では、摩擦式

浮文や爪形文、スタンプ文を施したもののほか擦文土器が出土している。さらに 10 層より下で、貼床、柱穴と周溝を有する竪穴住居跡と推定される遺構を確認した。これらは、A1・2 区（第 1 次調査）や A4 区で検出された遺構との関係が考慮される。

C2 区（第 3 次調査）

筑波大学の試掘地点 P3 に隣接する。上層から中層にかけて新しい時代に掘り込まれたピットが検出され、近現代遺物を伴う。以下、中・下層ともに刻文・沈線文土器が主体を占める。また、擦文土器を模倣したやや厚手の土器、擬縄貼付文を施した厚手の土器片が伴出している。下層では、A3・4 区や B10 区の下層で検出されたウニ殻・魚骨層に対比される堆積層が確認された。これらは遺跡の形成過程を復元するための良い手掛かりになるであろう。テストピット 1（第 2 次調査）と同様に、A・B 地点と比べ C2 区では二次的な混在資料が見当たらない。

C3 区（第 3 次調査）

筑波大学の試掘地点 P3・4 の中間に位置する。日程の関係で掘削を途中で停止しているため、US326（5 層）以下の土層の状態は不明である。上層では近現代遺物を伴う。全ての土層において刻文・沈線文土器が主体を占め、下層では元地式土器と擦文土器の伴出を確認した。A・B 地点の各調査区では年代の異なる資料の混在が顕著だったが、C3 区ではこうした事象が認められない。なお、摩擦式浮文に擦文土器系のモチーフを施した土器片が出土している。この資料は、刻文・沈線文土器と擦文土器（「擦紋Ⅲ」）の「共時性」を端的に示している。これは A・B 地点の各調査区で認められた擦文土器と元地式土器の伴出（共伴）状況を間接的に裏付ける点で注目されよう。

F1 区（第 4 次調査）

かつて北海道教育委員会が行った試掘調査 No.9 地点（推定）の西側、道道 108 号線の道路際に位置する。表土から 3 層まで陶磁器やガラス製品などの近現代遺物が出土している。湧水の影響により 5 層で掘削を停止した。湧水面付近で傾斜堆積する黄褐色砂礫層（4 層：近隣の F2 区では未検出）の性質と由来が注目される。

F2 区（第 4 次調査）

北海道教育委員会の試掘調査 No.10 試掘地点（推定）の南側、道道 108 号線の道路際に位置する。F1 区からは約 13m 離れている。表土から 3 層の上部まで、陶磁器やガラス製品などの近現代遺物が出土している。3 層の下部では、やや大きな石の周辺に厚手の大型土器が出土したほか、「十」状文を施した土器片などが検出された。4 層では、調査区の北側から半分以上を覆うように大型の植物遺体が検出されたが、激しい湧水によってそれ以上の掘削を停止した。

さて、以上の所見で特に注目されるのは、A3・A4 区、B10 区の木質遺物層（面）以下で、刻文・沈線文土器と元地式土器・擦文土器（「擦紋Ⅲ」）の「共伴」関係があらためて確認されたことである。これは浜中 2 遺跡 A・B 区の層位所見（前田・山浦編 1992、柳澤 2015：215-252）を裏付けるものであり、通説的な北海道の島嶼域編年に見直しを迫る成果と言えるであろう。F2 区における元地式土器と「十」状文を持つ土器の伴出も、これと同様の意義を有する。また 4 次に及ぶ A・B 地点の調査成果からみて、沼浦海水浴場遺跡は、近世から近代にかけて反復的に大きな地形の改変を被っていると考えられる。本報告では、木質遺物や陶磁器、金属製品などの理化学分析の成果ををふまえたうえで、複雑な遺跡の歩みを形成史の観点から統合的に検討していきたい。（柳澤・山谷・長山）

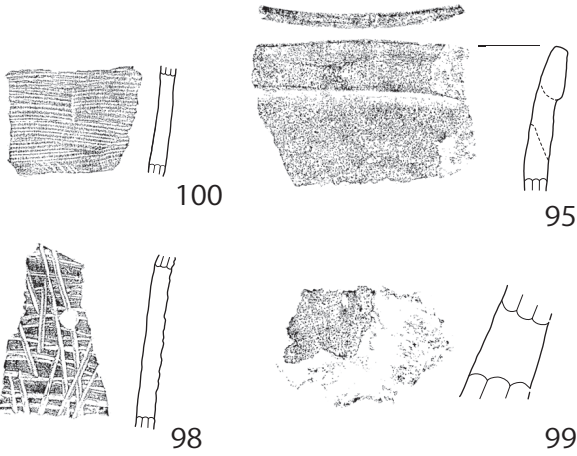
参考文献

- 岩城克洋・北 沙織・土肥幸子 編 2016『北海道礼文町 浜中 2 遺跡 第 5 次発掘調査概報』礼文・利尻島遺跡調査の会
- 岩城克洋・北 沙織・土肥幸子・藤原吉希・柳澤清一・山谷文人 2017『北海道利尻富士町 沼浦海水浴場遺跡 第 1 次発掘調査報告書』礼文・利尻島遺跡調査の会
- 内山真澄ほか 1995『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』利尻富士町教育委員会
- 大場利夫・大井晴男 編 1976『オホーツク文化の研究 2 香深井遺跡 (上)』東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男 編 1981『オホーツク文化の研究 2 香深井遺跡 (下)』
- 岡田淳子・西谷榮治ほか 1983「利尻島の埋蔵文化財 (1)」『利尻町立博物館年報』2 利尻町立博物館
- 岡田淳子ほか 1984「利尻島の埋蔵文化財 (2)」『利尻町立博物館年報』3
- 岡田淳子・梶田光明・西谷榮治 1978『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター
- 近藤玲介 2022「利尻島、沼浦湿原における泥炭上部の ^{14}C 年代資料」『利尻研究』41
- 佐藤達夫 1972「擦紋土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部
- 種市幸生・内山真澄・荒川暢雄 1997『礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 種屯内遺跡調査団 2002「利尻町種屯内遺跡発掘調査報告 総括篇 1 事実関係」『利尻研究』21
- 千葉大学文学部考古学研究室 編 2012～2016『北海道礼文町 浜中 2 遺跡 (第 1～5 次) 発掘調査概報』
- 名取武光 1933「利尻、禮文兩島に於ける考古學的調査報告」『史前學雜誌』5-3 史前學會
- 前田 潮・藤沢隆史 編 2001『礼文町 香深井 6 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦 清 編 1992『浜中 2 遺跡の調査』礼文町教育委員会
- 柳澤清一 2015『北方考古学の新潮流—「逆転編年」説の検証と年代観の改訂—』六一書房
- 柳澤清一 2017「礼文・利尻島編年の新検討 その (1) —香深井 5 遺跡を中心として—」『利尻研究』36
- 柳澤清一 2018「礼文・利尻島編年の新検討 その (2) —亦稚貝塚を中心として—」『利尻研究』37
- 柳澤清一 2019「礼文・利尻島編年の新検討 その (3) —亦稚貝塚から沼浦海水浴場遺跡へ—」『利尻研究』38
- 柳澤清一 2020a『環オホーツク海域考古学の新地平—新北方編年体系の検証から佐藤編年の広域改訂へ—』六一書房
- 柳澤清一 2020b「道北の島嶼域から道央・道南・道東とサハリン島を結ぶ擦紋Ⅱ並行期編年の検討—沼浦海水浴場遺跡の新発見資料から—」『先史考古学研究』13
- 柳澤清一・山谷文人・内山幸子 2020「亦稚貝塚における試掘調査 (2018 年)」『利尻研究』39
- 山谷文人 編 2011『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』利尻富士町教育委員会
- 山谷文人・内山幸子 2004「利尻島沼浦海水浴場遺跡発掘調査報告」『海と考古学』7
- 礼文・利尻島遺跡調査の会 編 2018『北海道利尻富士町 沼浦海水浴場遺跡 (第 2 次) 沼浦遺跡 (第 1 次) 発掘調査報告書』

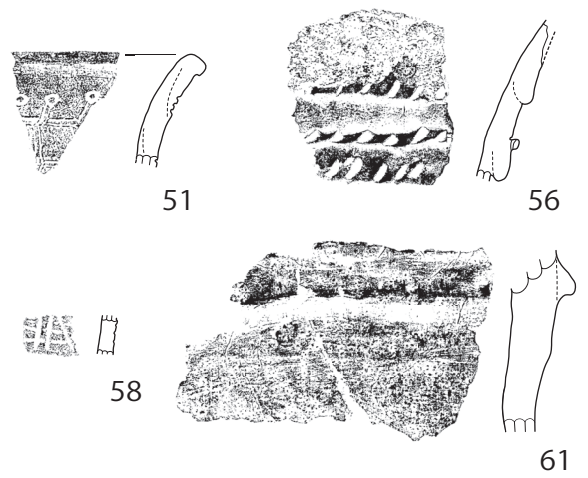
報 告 書 抄 録

ふりがな	ほっかいどうりしりふじちようぬまうらかいすいよくじょういせき だい3・4じはつくつちようさがいほう							
書名	北海道利尻富士町 沼浦海水浴場遺跡 第3・4次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳澤 清一・山谷 文人・長山 明弘・廣田 哲徳							
編集機関	礼文・利尻島遺跡調査の会							
所在地	〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33 千葉大学文学部考古学研究室 気付 TEL 043-290-2304							
発行年月日	西暦 2022 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ぬまうらかいすいよくじょういせき 沼浦海水浴場遺跡 第3次調査	ほっかいどうりしりぐん 北海道利尻郡 利尻富士町 おにわきあざぬまうら 鬼脇字沼浦 132、 146 番地	015199	H-10-16	45°	141°	2018.4.27 ~ 2018.5.16	約 12.5 m ²	学術研究
				06′ 52.3″	17′ 29.7″			
第4次調査	ほっかいどうりしりぐん 北海道利尻郡 利尻富士町 おにわきあざぬまうら 鬼脇字沼浦 146、 188-1 番地					2019.4.25 ~ 2019.5.15	約 8.5 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沼浦海水浴場遺跡	貝塚	縄文文化期 続縄文文化期 オホーツク文化期 擦文文化期 近現代	竪穴住居跡 貝層 木質遺物層	縄文土器 続縄文土器 オホーツク式土器 擦文土器 陶磁器 石器 骨角器 金属製品 各種近現代遺物				

B10 区 8 層

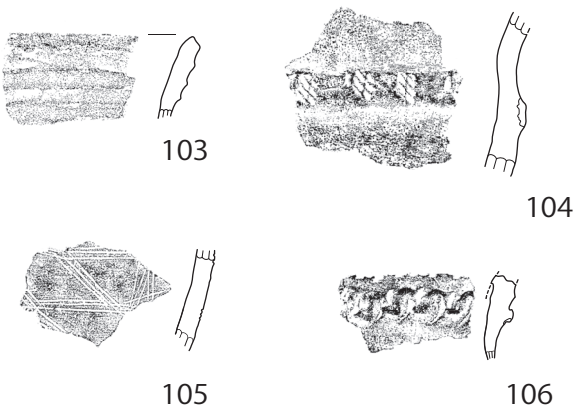


A3 区 US31

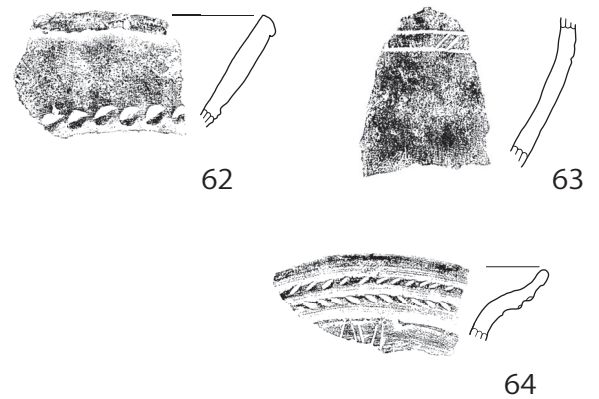


木質遺物層 (面)

B10 区 10 層 (上・下部)



A3 区 US32



北海道利尻富士町
沼浦海水浴場遺跡 第3・4次発掘調査概報

2022年3月31日 発行

監修 利尻富士町教育委員会
 編著者 柳澤清一・山谷文人・長山明弘・廣田哲徳
 発行所 礼文・利尻島遺跡調査の会 (代表: 柳澤清一)
 〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
 千葉大学文学部考古学研究室 (気付)
 〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野 6
 利尻富士町教育委員会

印刷・製本 株式会社グラフィック